
純愛

彩羽

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

純愛

【Nコード】

N9147B

【作者名】

彩羽

【あらすじ】

婚約までこぎつけた東風とかすみ。天道家は、正に幸せの絶頂だった。しかし、その幸せは少しずつ崩れようとしていた。

1 絶頂期

「ただいま」

学校から帰ると、居間の卓袱台に伏せるように、かすみお姉ちゃんが眠っていた。枕にしている左手の薬指にキラキラと光っているのは、一週間前に婚約したときに東風先生からプレゼントされた婚約指輪。

私は、お姉ちゃんの向かいに腰を降ろすと、寝顔をそつとのぞいた。
「幸せそう」

私の声に反応したのか、お姉ちゃんがゆっくりと顔を上げた。

「あかね……」

まだ頭がはつきりしていないのか、少し重そうに瞬きをした。

「珍しいね、お姉ちゃんがうたた寝してるなんて。」

「風邪、ひいちゃうよ。」と付け足しながら、お姉ちゃんにお茶を淹れた。

「ちよつと、疲れちゃつて。」

「結婚の準備とか、忙しいんですよ。無理しちゃダメだよ。」

「大丈夫よ。ほとんど東風さんが一緒に動いてくれているし。」

お姉ちゃんは、そう微笑んで、夕食の支度をしに、台所へ行った。

お姉ちゃんが式を上げるのは、春。今から半年以上先だけど、お姉ちゃんが春が良いって言ったらしい。

お姉ちゃんのウエディング姿、奇麗だろうなあって、いつも乱馬と話している。

「今まで苦勞をかけた分、あの子には幸せになってもらいたい。」
お父さんは、挨拶にきた東風先生にそう言った。

「絶対に幸せにします。なにがあっても、必ず守ります。」

先生は、優しい瞳の中に鋭い光を放っていた。

そんな先生の隣に座っているお姉ちゃんの表情は本当に穏やかで、優しさに包まれていた。

こんなささやかな幸せが私たちを永遠に包んでくれると信じていた。

「お姉ちゃん、今日ご飯何にする？」

その日は、かすみお姉ちゃんは東風先生とデートに出かけていて、なびきお姉ちゃんと私は居間で寛いでいた。

「何でも良いよ。どうしよっか。」

お姉ちゃんの結婚が決まって以来、二人で交代で料理を手伝うようになった。お姉ちゃんが安心して家を出れるように。

そして、だんだん私の不器用も直ってきた。

「こんにちは。」

急に、東風先生の声。

「あれ、お姉ちゃん、帰ってきたのかな？」

不思議に思った私たちは玄関に向かった。そこには、東風先生と、先生に抱きかかえられる形でやっと立っているかすみお姉ちゃんの姿があった。

「お姉ちゃん、どうしたの？」

なびきお姉ちゃんが東風先生からカバンを受け取り、「とりあえず部屋に」と誘導をした。私は焦って、ただ三人の後についていくだけだ。

「よいしょ。」

かすみお姉ちゃんをベッドに寝かせると、お姉ちゃんの額に手を当

てた。

「熱、ありますか？」

私の問いかけに、「少しね。」と答えた東風先生。なんでも、急に寒気がしてきたと言いだしたお姉ちゃん。先生が心配して、すぐに帰ろうと決め、帰っている途中でどんどん具合が悪くなったようだ。

「たぶん、疲れが溜まってたんだよ。なびきちゃん、悪いけど、足元に湯たんぽを入れて、額は、冷やしてくれるかな？」

「湯たんぽですか？」

「うん、手足が冷たいから。」

「分かりました。」

「僕、お父さんのところに行って来るから、ちょっと離れるね。」

先生はそう言って部屋を出て行ってしまった。

2、恐怖

東風先生が出て行って、私とお姉ちゃんは、ただただかすみお姉ちゃんの寝顔を見ていた。時々、苦しそうに唸り声を出すお姉ちゃんの寝顔を見ると、嫌な予感がした。

「お姉ちゃん…最近、無理してたんだよ。絶対…」

口を開いたのはなびきお姉ちゃんだった。

「うん。結婚式の準備と家事で、疲れが溜まってたんだろうね。」

私の脳裏に、卓袱台で突っ伏して寝ていたお姉ちゃんが思い浮かんだ。

今まで、お姉ちゃんがそんなことしたの、見たことがなかった。

「なびき、あかね…かすみはどうだね？」

お父さんが、東風先生と一緒に部屋に入ってきた。

東風先生は、お姉ちゃんの手を握ると、「湯たんば外しても大丈夫かな。」と呟き、

布団を捲った。

東風先生は、真剣な眼差しでお姉ちゃんの足首を掴み、しばらく握ると、ゆっくりと放した。

「やはり、病院に行ったほうが…」

先生は、お父さんの顔を見ずに呟いた。

「何？先生、お姉ちゃんどこが悪いんですか？」

「なびき、落ち着きなさい。かすみが起きてしまう。」

お父さんは、かすみお姉ちゃんの髪をゆっくりと撫でた。

「僕も、専門外だし、ちゃんと検査しなきゃ分からないけど…」

だいたいの病気なら、診察してくれる東風先生が、珍しく言葉を濁した。

「心臓に問題がある気がするんだ。」

「…心臓ですか？」

「うん。あ、でも分からないよ。ただ、疲れが溜まってただけって可能性もあるし。だから、一度診てもらった方が良いと思うんだ。」東風先生は、お姉ちゃんの寝顔をじつくりと見ている。その瞳が悲しそうで、その瞳を見ているだけで、お姉ちゃんの体があまり、良くないことがわかってしまった。

「なびき、すまんが明日、病院に付き添ってやってくれんか？」

「私が？」

「わしも一緒に行くが、なびきがいた方がかすみも気が楽だろう。」

「でも…」

お姉ちゃんは東風先生の顔を見た。

「僕が仕事休んで、病院に付き添っちゃうと、かすみさん、遠慮して検査受けないって言うと思うから。ごめんね。なびきちゃん。」

「分かりました。女同士って方が良いかもしれないし。」

こんな時のなびきお姉ちゃんは、本当に強いと思う。私は何もできないのか？そう思っていると、東風先生から声がかかった。

「あかねちゃん…ば、僕の診察が正しければ…に…入院に、なつちやうと、思う…だから、かすみさんが病院に行ったあと、入院の準備をして欲しい。」

「入院の準備ですか？」

「ごめんね、辛いこと頼んじゃって。」

お姉ちゃんは、本当に入院してしまうのだろうか？そんなこと信じられなかった。

その日の夜遅く、かすみお姉ちゃんは目を覚ました。

それまで、じつと傍についていた東風先生は、お姉ちゃんに「明日、病院に行つて、きちんと診てもらおう」と勧めた。

お姉ちゃんは、「大丈夫。疲れちゃっただけ。心配かけてごめんな

さい。」と断った。

でも、東風先生は、「きちんと診てもらわないと、心配だから。」と説得した。

お姉ちゃんは、きっと自分の身体のことだから、分かっていたんだと思う。もう、誤魔化せないと思ったのか、ゆつくりと微笑むと、「分かったわ。」と言った。

そして、帰ろうとする先生の手を握り、「もう少しだけ…」と呟いた。

私となびきお姉ちゃんは、二人を残して、部屋を出た。

部屋の中から、東風先生の「大丈夫。怖くないよ。」という優しい声が聞こえてきた。

隣で、なびきお姉ちゃんは唇を噛み、拳を強く握っていた。

3、離ればなれ

「あかね、準備できたか？」

コンコンと軽くノックをし、乱馬が部屋に入ってきた。

朝一番でかすみお姉ちゃんは病院に行った。微熱が下がらなくて、少し苦しそうだっただ。

お姉ちゃん達が病院に行くと、私は乱馬と入院の準備をした。カバンに着替えや日用品を詰め終え、昼食を取り終えた頃、なびきお姉ちゃんから入院が決まったことが電話で伝えられた。

お姉ちゃんの声は、いつになく沈んでいる。

電話でタクシーを呼ぶと、私は自室に戻って出かける準備をしていた。

「タクシー来たから。」

乱馬は、私の顔を見ることがなくつぶやいた。

「分かった。すぐ行く。」

ベッドの上に置いておいたバッグを乱馬は掴むと、「先に下に降りてるぞ。」とドアを閉めた。

「総合病院まで。」

運転手さんに行き先を告げるとタクシーは走り出した。

乱馬は、ずっと私の震える手を握っていてくれた。

病院に着くと、かすみお姉ちゃんの病室に入った。お姉ちゃんは、

ベッドの上で眠っていた。

「点滴が効いて、今眠ったところなのよ。」

「かすみさん、大丈夫なのか。」

「今日は、お姉ちゃんも疲れてるから、簡単な検査だけして、明日もう一度検査をするんだって。」

「そつか。やっぱり、その、原因は…」

「心臓じゃよ。原因は不明だが、心筋症という病気らしい。」

『心筋症』という病気をお父さんの口から聞いてもピンと来なかった。

「詳しいことは、明日の検査のあと、話してくださるそうじゃ。なびきもあかねも、明日は、学校から戻ったら家で待っていてくれ。夜、きちんと話すから。」

お父さんの声は悲しみに包まれていて、下を向いているので、表情はわからなかった。

面会時間、ギリギリに東風先生が顔を出した。その頃には、かすみお姉ちゃんも目を覚ましていて、東風先生の顔を見ると、「こんな時期に入院なんてごめんなさい。」と苦笑いをしながら謝った。

「良いんだよ。ゆっくり休んで。僕は、ずっと待つてるから。」

「も。東風さんたら。」

やっと安堵の笑みを浮かべたお姉ちゃん。面会時間ギリギリまで、お姉ちゃんを楽しそうに東風先生と話しをしていた。

面会時間が終了すると、お姉ちゃんは、少しだけ寂しそうな顔をした。そんなお姉ちゃんの顔を見つめ、東風先生は「明日は、検査の前に顔を出すから。」と気持ちを宥めていた。

二人の間だけ、穏やかな時間が流れていた。

神さま…どうか、この穏やかな時間を…

奪わないでください…

4、悲痛

「あかね、乱馬くん。」

学校からの帰り道、なびきお姉ちゃんの声が後ろから聞こえた。

「お姉ちゃん。遅かったのね。」

今日は、私と乱馬は掃除当番だった。いつもは、友達とダラダラやる掃除も、今日ばかりかは、真剣にやった。だから、なびきお姉ちゃんは先に帰ったとばかり思っていた。

「だって、あんた達が掃除当番って聞いてたから、一人で帰って家にいるのも…」

お姉ちゃんは、強がった笑顔を浮かべた。

学校から戻った私たちは、お父さんの帰りを待った。お父さんが行く予定だった出稽古は、早乙女のおじさまが行ってくれた。

三人とも食欲が無かったけど、乱馬が用意してくれたご飯を食べた。私となびきお姉ちゃんで片づけをしていると、お父さんが東風先生を連れて帰ってきた。

一足遅れて帰ってきたおじさまも集まり、六人が居間に揃った。

お父さんが重い口を開いた。

「夕方、検査が終わった。…かすみの病気は、拡張型心筋症だ。」

お父さんは、一口お茶を飲んだ。

「何なの？その拡張型心筋症って？」

なびきお姉ちゃんが眉をひそめた。

「それは…」

お父さんが言葉を選んでいると、「僕が話します」と東風先生が口を開いた。

お父さんは、先生の顔を見て、一つ頷いた。

「あのね、心臓って筋肉の塊なんだよ。その筋肉が薄くなって、血液が上手く流れなくなっちゃうんだよ。それで、身体に不調が起きるんだ。」

「例えば、どんな…」

「はじめは、ちよつと疲れたって感じで、だんだん進んでくると、呼吸が苦しかったり、浮腫んだりして、そのままにしておくと、どんどん身体が弱っていつっちゃうんだ…」

私は震えが止まらなかった。乱馬が「あかね」と私の肩をそつと寄せてくれた。

「先生、治療法はあるんでしょ。どうすれば…」

「それは…」

先生の目が一瞬泳いだ。それを見て、お父さんが口を開いた。

「かすみが完治するためには、心臓移植しかないそうだ。」

「心臓移植…」

私は目の前が真っ暗になりそうだった。テレビでしか聞いたことのない言葉。私には、正直、無縁だと思っていた。

「移植なんて、簡単にできることじゃないから、とりあえずの治療として、食事制限、点滴や薬などで、症状を緩和するそうだ。」

「ど、どのくらい入院するの？」

言葉が震える。

「この病気は、いつ悪化するのか分からないんだ。だから、入院が基本だそうだ。症状がもう少し落ち着けば、一日だけなら帰れるようだが。」

「そんな…」

涙が頬に流れてきた。横では、お姉ちゃんがすすり泣く声が聞こえ

た。

「なびき、あかね…辛いことだが、きちんと聞いてくれ。」
私とお姉ちゃんは顔を上げ、お父さんを見つめた。

「かすみが…移植をせずにこの冬を越すことができるのは、奇跡に近いかもしれない。」

お父さんは、それっきり、肩を震わせて泣いた。

「どうして…どうしてお姉ちゃんが…やっと自由に、幸せになれる
と思っていたのに…」

なびきお姉ちゃんの声が部屋に響く。東風先生は、両手で顔を覆っている。

「代われるものなら、わしが代わってやりたい…」

お父さんの悲痛な叫びが私の心にズシリと響いた。

いつも自分のことより、家族を優先して、優しい微笑みを浮かべて、私達を包んでくれたお姉ちゃん。

誰よりも幸せなこれからが待っていると信じていたのに。

神さま - お姉ちゃんを救ってください。大好きなお姉ちゃんを私達から奪わないでください…

5、現実

お姉ちゃんの生活は、塩分を控えた食事と、投薬が中心だった。相当、無理をしていたみたいで、まずは、病状を安定させ、体力を安定させるのが先決だった。ベッドで寝たままのお姉ちゃんは、文句も一つ言わず、帰り際に「ありがとう、気をつけて帰ってね」と私達を気遣ってくれた。

治療が効いているのか、お姉ちゃんは熱を出すこともなく、ほとんど、普段と変わらない様子だった。点滴が繋がれた腕は痛々しかつたけど、病院に行くたびにお姉ちゃんの笑顔が見れると、安心した。

入院して三週間。その日は、なびきお姉ちゃんと一緒に朝から病院に行っていた。

お父さんとおじさまは、出稽古に行っていた。

私達が行ったときには、お姉ちゃんはベッドに横になっていた。朝は起きてることが多いお姉ちゃんだから、ちよつと心配になる。

「調子悪いの？」

なびきお姉ちゃんが心配して声を掛けた。

「大丈夫よ。ちよつと横になってただけ。何だか、暇で…」

「お姉ちゃん、東風先生来ないからご機嫌ナナメなんですよ。」

「え？」

なびきお姉ちゃんがからかう。

「惚けちゃって。ゴメンネ、私とあかねで。仕方ないでしょ。東風先生、忙しいんだから。」

「そんなこと、分かってるわよ。それに、二人とも良いのよ。二人

だつて自分のことやらなきや。休みのたびに来ること無いんだから。

「良いのよ、私達は好きできてるんだから。」

「ありがとう。二人とも。」

なびきお姉ちゃんが言ったとおり、最近、東風先生が来ていないので、お姉ちゃんは元気がない。実は、一昨日から、東風先生は風邪を引いてしまったのだ。少しの細菌でも、お姉ちゃんの病状は悪化してしまうかもしれない。だから、東風先生は完全に治るまでお姉ちゃんに会えないのだ。

お姉ちゃんが心配するから、「仕事で忙しい」と伝えた。

東風先生が体調を崩すのも、無理なかった。

だつて…朝は診察時間ギリギリまでお姉ちゃんのところに行き、夕方まで診察をすると、また、面会時間ギリギリまで、お姉ちゃんと過ごした。帰ってきてからは、仕事の準備をしながら、お姉ちゃんに効果的な治療法がないのか、医学書を読み漁っていた。

一昨日、電話をかけてきた東風先生の声は本当に辛そうで、お姉ちゃんが聞いたらすぐに飛んでいったらうって思う。

先生は、お姉ちゃんのことを心配で毎日電話をかけてくる。

「変わりないよ。」

というと、心底安心して、電話をきる。

先生、やっぱりお姉ちゃんのこと、大好きなんだってわかった、ちょっと嬉しい。

昼まで、三人で話をしながらゆつくりと過ごした。

「二人ともご飯いつてらっしゃい。」

「まだ良いわよ。お姉ちゃん食べてからで。」

「一人で食べれるから。大丈夫よ。」

「でも…」

私が「一人で食べても美味しくないでしょ。」って言おうとしたのを、なびきお姉ちゃんが遮った。

「あかね、行きましょ。お姉ちゃんにアーンってできるのは、愛しい東風先生だけなのよ。」

「なびき！」

お姉ちゃんは苦笑いしながら、「あかね、大丈夫だから、行っただい。」と言った。

私は、なびきお姉ちゃんに連れられるように、病室を出た。

「別に、昼ごはんなんていつでも良いのに…」

呟いた私に、お姉ちゃんは、「バカね」と言った。

「バカって、どうして？」

「お姉ちゃん、食事するところ、あんまり見られたくないのよ。塩分も控えめでお世辞にも美味しいってご飯じゃないでしょ。我慢してるのよ。お姉ちゃんにとっては、体力を戻すことも治療のひとつだから。」

「そっか、気付かなかった…」

「お姉ちゃん、どうってことないって顔してるから。もっと、頼ってくれば良いのに。」

お姉ちゃんは「結局、お姉ちゃんが弱みを見せるのは、東風先生だけなのよ」と呟いた。

昼食を取って、病室に戻ると、お姉ちゃんのベッドには半分しか手が付けていない昼食があった。そして、お姉ちゃんは、ボーっと外を眺めていた。

「食欲、無いの？」

「ええ。なんだか、食べたくないの。」

「気分は？」

「大丈夫よ。食欲があまりなかったただけだから。」

「そう。しばらく寝る？」

お姉ちゃんは首を振った。朝、少し長く寝たから眠くないみたい。

なびきお姉ちゃんはカバンから、小説を一冊出した。

「忘れてた。お姉ちゃんがこの前読んでた本の続き。」

かすみお姉ちゃんは受け取ると、パラパラとページを捲った。でも、「後で読む」と本を閉じてしまった。

そこへ、トレイを取りに、看護師さんが来た。

「天道さん、珍しいですね。食事残すなんて。具合でも悪いですか？」

看護師さんは、胸から体温計を出すと、お姉ちゃんの胸に挟むよう指示をした。

38

「ちょっと高いですね。」

看護師さんは、お姉ちゃんに楽な姿勢を取るようと言い、私達には、「大丈夫ですよ。」と声をかけてくれた。

「天道さん、熱出ちゃったんだって？」

すぐに先生が来て、お姉ちゃんを診察する。お姉ちゃんは、だんだん苦しそうに呼吸を始めた。

「大丈夫だよ。すぐに楽になるからね。」

手早くお姉ちゃんの口に酸素マスクが付けられた。お姉ちゃんの口から「痛い、いたい」と声が聞こえ、胸を強く握っていた。

私もなびきおねえちゃんも、かすみお姉ちゃんの容態が急に変わったことに、驚きを隠しきれず、呆然としてしまった。

「外でお待ちいただけますか？」

看護師さんにそう言われ私達は廊下に出た。
初めて経験したお姉ちゃんの急変。

これが、私達が置かれている現実なのだ。

6、微笑み

「お父さんに連絡してくる。もう、帰ってるはずだから。」

なびきお姉ちゃんは、公衆電話を探しに場所を離れた。閉ざされた病室の扉からは、先生の指示をする大声が聞こえてくる。さっきのお姉ちゃんは、いつも穏やかに笑っていた顔からは想像もできない、苦しそうな顔だった。

「お父さん、すぐ来るって。」

なびきお姉ちゃんは、缶ジュースを二本買って帰ってきた。

「ほら、落ち着くから……」

「ありがとう。」

私は一口飲んでフーとため息をついた。

「大丈夫？あかね、あんた顔色真っ青よ。」

「うん、大丈夫……」

お姉ちゃんは私の背中を擦ってくれた。

「やっぱり、お姉ちゃんが昼ごはん食べる時、一緒にいれば良かった。そしたら、早く気付けたかもしれないのに……」

「お姉ちゃん、それは、お姉ちゃんのせいじゃないよ。思いつめないで……」

「ありがとう。」

「天道さん……」

扉が開いて、先生が出てきた。

「先生、姉は……」

「大丈夫、今、落ち着いたから。」

「良かった。」

「先生！」

お父さんは、息を切らし、乱馬と走ってきた。

「天道さん、大丈夫ですよ。今は薬で眠っていますが…念のため明日、エコーを取りましょう。」

「先生、原因は…？」

「おそらく、細菌が身体に入ってしまったようです。」

「細菌ですか。」

「健康な人にとっては、問題もない微量な菌でも、発作を引き起こしてしまうことがあるんですよ。」

「なびき…今日のかすみは具合はどうだったね？」

「お姉ちゃん、朝から具合が悪そうだったの。朝、寝てることなんてないのに、寝てたし。ご飯も残してた。本も読もうとしなかったし…でも、調子が悪いのって聞いたら大丈夫って…」

なびきお姉ちゃんの唇は震えている。

「少しでも辛いなと感じたら、今は絶対安静が基本です。でも、天道さんの場合は、これくらいのことで、迷惑かけたくないが無理してしまうんですね。」

先生は、「落ち着いたら、一度メンタル的な部分も含め治療の見直しをしていきましょう。」と私達に提案してくれた。「よろしくお願いします。」とお父さんが頭を下げたのに続き、なびきお姉ちゃんと乱馬、私が続いた。

その日は、お姉ちゃんが起きる前に、病院を出た。

電話で東風先生に報告すると、先生は悲しげな声で「僕が移しちゃったかも…」と呟いた。

「先生が原因だったら、もっと早くに症状が出てますよ、きっと。」

「気を使ってくれてありがとう。」

「それより、先生、早く元気になってくださいね。お姉ちゃん、待ってるんですから。」

「うん。熱も下がって、咳もでないんだけど、もう2、3日様子を見て、病院に行くようにするよ。」

先生は、「僕も早く会いたいよ」と笑いながら呟いた。

「もう、先生ったら…でも、先生、無理しないでくださいよ。」

「うん。今回のことは僕も反省しているんだ。結果的にかすみさんに会えなくなっちゃったしね。」

私は、「じゃ、大事にしてくださいね」と言い、受話器を置いた。

翌日、かすみお姉ちゃんは、エコーを取ったりしたけど、異常はなかった。まだ、食欲は戻っていないけど、熱も下がり呼吸も安定した。

お姉ちゃんは、ちょっとでも疲れたらすぐに横になること、無理はしないことを約束してくれた。そして、しばらくは、私達が面会に行った時に熱はないか確認することにした。
お姉ちゃんの穏やかな微笑みが帰ってきた。

そして…ついに…

トントン

扉を叩く音がした。

「はい…」

かすみお姉ちゃんが小さく返事をした。

「かすみ…」

「東風さん!」

かすみお姉ちゃんの顔が明らかに変わった。

心の底からの笑顔…という感じ。

「調子はどう？」

「ええ。今は安定してる。」

「そう…」

東風先生は、リンゴを二つカバンから出した。

「これ、良かったら…果物は良いって聞いたから。」

「ありがとう。良いにおいね。」

お姉ちゃんは真っ赤なリンゴを手にして、嬉しそうに笑う。

先生はリンゴを摩り下ろすと、スプーンにすすき、「アーンして」と言った。

「ちよつと、恥ずかしいわ。」

苦笑いして、私や乱馬をお姉ちゃんが見る。

先生は「良いから、ほら口開けて」と言ってスプーンをお姉ちゃんの口に入れた。

「おいしい？」

「ええ。」

先生は、ゆつくりと頷くと、立ち上がりカーテンを引いた。少しだけ部屋が暗くなる。

「これで、まぶしくない？」

「ありがとう。」

二人の微笑みを見ていた乱馬が「あかね」と小さく呟いた。

「うん。」と私は返事をし、ソファに置いておいたカバンを手にした。

「お姉ちゃん…私、帰るね。」

「ええ。ありがとう。」

「かすみさん、すっげー嬉しそうだったな。」

「ね、先生のこと、大好きなんだから。」

乱馬と手を繋いで帰る道。少しだけ、穏やかな夕暮れだった。

7、ご褒美

お姉ちゃんの体力が安定してくると、散歩をするのが日課になった。散歩をするときは、いつもお父さんが隣にいた。お父さんは、お姉ちゃんが倒れて以来、毎日お母さんのお墓に行つて、「かすみを守つて欲しい」とお願いしている。

お父さんは、時間さえあれば、かすみお姉ちゃんの傍にるようにしていた。

お姉ちゃんが倒れて一ヶ月くらい経つた頃、わたしとなびきお姉ちゃんは、お父さんに呼び出された。お父さんは「おまえ達には悪いんだが…」と切り出した。

「かすみには、母さんが亡くなって以来、ずっと苦勞をかけてきてしまった。やっと幸せになると思っていたのに、病気が分かってしまった。父さんは、かすみに何もしてやれない。せめて、今、かすみの傍にいて、不安になつたり、さびしくなつたりしないようにしてやりたいんだ。それしか、父さんはできないと思つている。でも、それには、なびきやあかねに負担もかけてしまうのではないかと申し訳なさでいっぱいなんだ。」

目には涙が溜まっている。お父さんの気持ちはすごくよく分かった。だから、反対はしなかった。その代わり、無理はしないでねと伝えた。

「ありがとう。」

お父さんの答えはそれだけだった。

お姉ちゃんの体調は先生も驚くくらい安定していた。それだから安心と言い切れることはなくて、時々急に熱がでたり、発作が起こつ

たりした。その度にお姉ちゃんは顔を歪めた。

お父さんは、その度に病院で付き添い、東風先生に聞いたマツサージなどをしていた。

お姉ちゃんは「お父さん、無理しないで」といつも気遣っていた。

そんなお姉ちゃんが、珍しく病院でわがママを言った。

それは、いつもの診察の時だった。

「安定してますね。今日も、無理せず歩いてくださいね。」

先生は、聴診器を耳から外すとカルテに何やら書き込みをする。お姉ちゃんは、ボタンをはめながら、「先生」と呟いた。

「どうしました？どこか調子悪いところか？」

「いえ…あの…お願いしたいことがあるんです。」

「お願い？」

「はい。調子が良ければ良いんです。今度の日曜日、短時間で良いから家に帰っても良いですか？」

「え？」

私と一緒にいたお姉ちゃんは驚いた。でも、すぐに気付いた。今度の日曜日…

お父さんの誕生日だ。

「そうだね…」

先生はカルテに目を通す。

「最近、症状も安定しているし、リハビリも頑張ってるしね。僕も、一日くらい外泊許可を出そうと思ってたんだよ。これから、もっと寒くなると、外泊もできなくなるし、このくらいの時期が良いかもね。」

「じゃあ、良いんですか？」

「うん。ただし、発作が起きたり、熱がでたら駄目ですよ。当日、

ちゃんと僕の許可が降りてからね。」

先生は、お姉ちゃんと私達を見ながら微笑んだ。

「ありがとうございます。」

先生は、「今まで、頑張ったご褒美だよ」と笑って病室を出て行った。

フーと息を吐くとかすみお姉ちゃんは、私達に「日曜日まで内緒よ。」と人差し指を立て、唇に添えた。

「分かってるって。こっちはまかせて。ちゃんと内緒で準備進めるから。」

なびきお姉ちゃんは、胸を張って嬉しそうに笑った。

三姉妹で内緒で計画するお父さんの誕生日。

何年ぶりだろうか…

お父さんの嬉しそうな顔が目に見えた。

あと、5日。

お姉ちゃんが元気に過ごせますように…

8、祝い

「お父さん、お姉ちゃんのところ行つて来るね。」

日曜日、私となびきお姉ちゃんは、かすみお姉ちゃんを迎えに病院に行った。

病室では、お姉ちゃんが荷物をまとめて待っていた。先生から1泊だけ外泊許可が降りたのだ。

お姉ちゃんは、綺麗にお化粧していて、艶やかな唇の色が色づく。「異常なしですって」と動いた。

私達は病院を出るとタクシーで家に戻った。途中でケーキ屋さんに頼んでおいたバースデーケーキを取りに行く。いつもは、食事制限のあるお姉ちゃんだけど、今日は先生から無理しない程度にとお許しが出了た。窓の外を嬉しそうに眺めるお姉ちゃんは、色が変わった木々を見て「綺麗ね」と何度も呟いていた。助手席に座っているなびきお姉ちゃんは「無理しないでよ」と何度も忠告する。

タクシーを家の前に止めてもらうと、私はトランクから荷物を出す。

「お父さん、どんな顔するかな……」

なんだか、なびきお姉ちゃんが一番嬉しそう。

「お父さん、ただいま。」

「なんだ、なびき、早かったな……」

なびきお姉ちゃんは、かすみお姉ちゃんの背中をポンと叩いた。かすみお姉ちゃんはゆっくりと微笑みながら頷く。

「お父さん……」

一瞬の沈黙。

「かすみ……かすみか？」

ドタドタと廊下を走る音がして、お父さんが現れた。「どうして……」
お父さんはゆつくりと、かすみお姉ちゃんの前に行くと、ゆつくりと抱き締めた。

「何があつたんだ？」

「外泊許可もらったの。」

「お姉ちゃん、先生にお父さんの誕生日に帰りたいって言って。病状も安定していたからお許しが出たのよ。」

「そうか。良かった。ありがとう。最高の誕生日だ。」

お父さんは、かすみお姉ちゃんの身体をゆつくりと撫でる。

「でも、無理は良くない。すぐに休みなさい。」

お姉ちゃんはコクリと頷くと昼までゆつくりすると言った。これは、私達の中でも先に決めておいた約束だった。どうしても夕食を作りたいと言ったお姉ちゃんに、なびきお姉ちゃんは、「その代わり昼までゆつくりして」と言った。今日の誕生日を最高のものにするためにと、お姉ちゃんの体のことを考えてのことだった。

夕方、お姉ちゃんがわが家の台所に立った。トントンとリズム良く、野菜を刻む。

お父さんは心配そうに台所を見つめている。そこへ、診察を終えた東風先生が駆けつけた。

「朝、病院に行ったとき、そんなこと言ってなかったのに。」
と寂しそうな顔をした。

「ま、先生、許してやろうぜ。男より、やっぱり姉妹なんだよ。」
乱馬がからかう。クスクスと笑いながら、お姉ちゃんが料理を並べていく。

野菜の煮物、鯛の煮付け、唐揚げ、きんぴらごぼろ……お父さんの好きな食べ物ばかり。

お父さんは目を細めて料理を眺める。

「はい、お父さん。」

ご飯を盛ると、かすみお姉ちゃんはビールの蓋を開ける。でも、白くて細い腕では力が入らないようで、東風先生が隣からそっと力を貸した。

「いやー実に美味しいよ、ね、早乙女くん！」

お父さんは、嬉し涙を流しながら、次々にほお張っていく。

市販のケーキですら「食べるのがもったいない」と惜しんでいて、なびきお姉ちゃんは呆れて言葉にもならなかった。

「お父さん、ちょっと、待っててね。」

かすみお姉ちゃんは、ひと段落した食事のあと、そう言って二階に上がっていった。

「かすみー、急がんでもいいぞ。ゆっくりな。」

駆け足のお姉ちゃんにお父さんが声をかける。

「おまたせ。」

お姉ちゃんの手には、紙袋がある。

「はい。お父さん。お誕生日おめでとう。」

「わしに…か…」

受け取ったお父さんは、ゆっくりと袋を開いた。

「あ…」

お父さんは袋に手をいれ、中のものを出す。

中には、モスグリーンの手袋とマフラーが入っていた。

「かすみ…」

「いつも、お散歩、一緒に行ってくれてありがとう。」

「かすみ、おまえ…わざわざ作ってくれたのか。」

お父さんは、骨ばった小さな手を強く抱き締めた。

「ありがとうな、かすみ。おまえって子はどうして、自分のことを一番に考えないんだ？父さんのことなんて良いんだよ。」

お姉ちゃんの身体を愛しそうに抱き締めるお父さん。

「お父さん…身体、大事にしてね。」

お姉ちゃんの言葉に、お父さんは顔を上げた。

「私が言えることじゃないけど…お父さんには元気でいて欲しいから。」

お姉ちゃんの目から涙が落ちた。

病気のことで、初めて見せたお姉ちゃんの涙だった。

9、痕

お父さんの誕生日の翌日、お姉ちゃんは再び病院に戻った。いつもと変わらない日常が過ぎようとしていた。

でも、私達は、お姉ちゃんの症状が安定していたから、この変わらない日々のすごさを忘れていた。

「天道さん、今日からお薬変えましょうね。」

お姉ちゃんに先生はそう言った。「副作用が出ちゃうかもしれないけど、頑張っていきましょう。」先生は、一つひとつの薬を説明しながら、お姉ちゃんの机においていった。

「なんだか、いっぱいね。」

先生がいなくなってから、お姉ちゃんはため息をついた。

「仕方ないよ。」

東風先生は、薬を一つひとつじっくりと見ながら、袋につめていく。その日も、何の変わらない日だと思っていた。

「かすみ、どうした？」

昼食を食べ終えた頃、お姉ちゃんが胃の辺りを頻繁に押さえ始めた。

「なんともない。だけど、ちょっと気持ち悪くて…食べ過ぎたかしら…」

「どんな具合なの？」

「気持ち悪い…」

「吐きそう？」

「大丈夫だと思う。」

東風先生は、お姉ちゃんの背中を擦ってあげる。

「他には？」

「お腹と頭が痛い…目が回る…」

「分かった。楽な姿勢取って。あかねちゃん、ナースコール押して

…」

「東風さん…」

「どうした？」

「手を握っていて。」

「分かった。」

先生はお姉ちゃんの手を握り、「すぐに楽になるよ」と励ます。先生の代わりに私がお姉ちゃんの背中を擦る。すぐに、先生が来て診察をしてくれた。眉間の皺が私を不安にさせる。

「外でお待ちいただけますか？」

看護師さんの言葉に私達は頷く。

「かすみ…手を放して。外で待ってるから。」

「傍にいて。手を握っていて。」

「かすみ…大丈夫だよ、先生が楽にしてくれるから。」

「良いですよ、近くで励ましてあげてください。」

東風先生に先生はそう言って治療を続けていく。かすみお姉ちゃんの手は、強く東風先生の手を握っていた。

一晩、お姉ちゃんは、腹痛や吐き気など副作用に苦しんだ。

翌日、薬でお姉ちゃんの症状は落ち着いた。でも、顔色が悪く、ぐったりしている。今日は、東風先生と外に散歩にいく予定だったけど、中止になった。

「まだ、気持ち悪い？」

「もう大丈夫。」

東風先生は、おねえちゃんの頭をポンポンと抑えながら「良かった」と言った。

「あら、東風さん、手…」

東風先生の手首には、お姉ちゃんが握った痕が痣になっていた。

「ひよつとして…私が…」

「いや、大丈夫だよ、こんな痣。これで、かすみが安心するなら…」
東風先生はフニヤとした笑いを浮かべる。

「でも、痛かったでしょ。」

「これくらい、大丈夫だよ、それに、かすみの痛みは二人で分かり合いたいんだ。」

先生は「夫婦になるんだから。」と恥ずかしそうに言った。

それを聞いているお姉ちゃんの顔は、暗い。どうしたんだろう。いつもこつちが、焼けそうなくらい、嬉しそうな顔をするのに…

「ちよつと横になつても良い？」

お姉ちゃんは急にそう言った。

「良いけど、調子が悪いの？」

「大丈夫。でも、明け方までお腹が痛かったから、今日は安静にしているように先生にも言われているの。少し休むわ。東風さんも明日、仕事だし…」

お姉ちゃんは、先生の顔を見ず、横を向いてしまった。休みたいというお姉ちゃんに、私達はどうしようもできず、病室をでた。

これが波乱の幕開けだなんて、私には想像もつかなかった。

10、予感

あの日から一週間。

お姉ちゃんの具合は、あまり良くなかった。心臓の負担を減らすための薬の副作用が出てしまったのだ。ベッドで寝ていることも多く、散歩もあまり長く行かなくなってしまった。

それでも、お姉ちゃんは私達が行くと、笑顔で迎えてくれた。

私は、学校が終わると、珍しく一人で病院に向かっていた。

玄関でお父さんと東風先生に擦れ違った。

「お父さん、東風先生！」

「おお。あかね。」

「どうしたの二人で？」

「ちよっと、話があつてね。今から家で東風君と少し話す予定なんだよ。」

「そう。じゃ、私、お姉ちゃんの顔見てから帰るねえ。」

先生は、なぜか下を向いてばかり。「どうしたの？先生？」心配になつて声をかける。

「いや、なんでもないよ。じゃ、先に行くね。」

東風先生は、お父さんの方を見ると軽く頷き、二人は歩き出した。

「お姉ちゃん……」

「あら、あかね……」

お姉ちゃんは珍しく編み物をしていた。もうほとんどができあがっている。きつと、私達がいらない、昼間にコツコツと編んでいたんだろう。紺色のマフラー。東風先生にかな……

「今、お父さんと東風先生に会ったよ。」

「そう……」

お姉ちゃんは手を休めることなく相づちを打つ。

「でも、まだこの時間なら、先生、そんなに長くいなかったんじゃない？お父さんもちよつとは考えれば良いのにね。」

お姉ちゃんは、ニツコリと笑うと、「このマフラー乱馬くんに。」とできあがったばかりのマフラーを私にくれた。

「去年、作らなかつたから。前に作つたマフラー、もうボロボロになつちやつたでしょ。」

「え、東風先生にじゃなかつたの？」

私の質問が聞こえなかつたみたいにお姉ちゃんは机の上を片付けると、「ちよつと頑張つて作りすぎちゃつた。横になつても良い？」と私に聞いた。

「良いけど、大丈夫？」

「大丈夫よ。ちよつと眠くなつちやつただけ。」

お姉ちゃんは、ベッドに横たわると、私に背を向けた。

お姉ちゃん、東風先生の話を全くしないのは、私の気のせい？このマフラー、本当に乱馬にくれるために作つたの？

少しばかり、お姉ちゃんの背中を眺め、私は「お姉ちゃん、今日は帰ろうか？」と聞いた。

しばらく沈黙があつて、「ごめんね。来てくれたのに…」と返つてきた。

「また、明日。乱馬に、マフラーありがとうね。」

私は、わざと明るく別れを告げ、急いで家に戻つた。

お父さんと、東風先生が何を話しているか…
嫌な予感がした。

11、別れ

「ただいま！」

病院から戻ると、居間には、なびきお姉ちゃんと乱馬が集まっていた。

「あかね…」

「あかね、やばいよ。なんか、お姉ちゃんと先生、婚約解消するみたいよ！」

やっぱりっていう悲しい思い。

病院から帰るとき、何度と予想していたこと。でも、私の思い過ぎだっと思ってしまった。

「なんか、今日、お父さんにお姉ちゃんが言っただみたいよ。婚約を解消して欲しいって。先生は、納得いかないみたいで、首を振ってばかりなんだけどね。」

一部始終をみていたなびきお姉ちゃんがオロオロしながら話す。

乱馬は「何なんだよお」って言いながら、頭を掻いている。

「なびき、あかね、乱馬くん…中に入りなさい。」

私達の会話が聞こえてきたのか、襖をゆつくりと開けた。

「知ってると思うが…東風くんとかすみの婚約を解消することにした…かすみの願いを東風君には聞いてもらうという状態になったが。」

「先生は、良いのかよ？あんなに好きだったかすみさんと婚約までいって。かすみさんが病気だから、別れようってそれで良いのか？」
乱馬が声を荒げる。

「乱馬くん…今回のことは、かすみからなんだよ。東風君は、反対した。かすみと一緒にいたいと言ってくれた。でも、かすみが望ん

でないんだよ。」

「お父さんだつて、分かるでしょ。お姉ちゃんは病気で辛くて…東風先生と一緒にいたいって本当は思っているんだから。」

「分かっているよ。だから…かすみを説得した。でも…あの子は言ったんだ。」

「もう、迷惑をかけたくないって。お医者さんとして力を発揮して欲しいから、自由にさせてあげたいって。私だけにかかりきりになつて欲しくないって。」

優しいお姉ちゃんの考えること。簡単に想像がつく。

「かすみは、東風くんの手首の痣を気にしていたよ。あんな風に迷惑をかけるのは自分も辛い。私は、何も助けてあげられなくて、助けてもらつてばかりだから、婚約なんかで、縛りたくないとも言っていた。」

「考えてみれば簡単なことかもしれない。将来のある君を、かすみのことで、病院と自宅に縛り付けてしまっている。研究だつてしたんだろうに…これは、かすみからじゃなく、もつと早い段階で、わしが言うべきだったと思う。君が優しく、かすみを思ってくれることに甘えてしまっていた。」

「わがままばかりで、申し訳ない…」

頭を深く下げお父さん。

私達は何も言えなかった。

お姉ちゃんの気持ちも分かるから…先生もだからこそ、何も言えないんだと思う。

でも、一つだけ言える事実。

二人は今でも愛し合っているってこと。

だからこそ…先生はお姉ちゃんのことを尊重しようとするだろう。

「早雲さん…頭上げてください」

婚約して以来、「お父さん」と呼んでいた先生が「早雲さん」と呼んだ。

なびきお姉ちゃんは、天井をみて涙をこらえている。

「婚約、解消します。今までありがとうございました。」

先生の涙…初めて見た。

お父さんは、頭を下げたまま、小刻みに揺れていた。

お姉ちゃん、本当に良いの？

東風先生が帰り、みんな各々の部屋に戻った深夜。私は眠れずに今までの二人を考えていた。

昔、まだ、私が東風先生のことが好きだった頃…

いつも先生はお姉ちゃんを目で追っていて、あの穏やかな微笑みに吸い込まれていた。

悔しいって思った頃もあったけど、叶わないとも思った。

妹の私が見ても、お姉ちゃんは大人になるにつれてどんどん綺麗になっただけだから。

「ほかの男に取られちゃうよ」なんて、「冗談を言って、先生をわざと慌てさせた時もあった。

乱馬と協力して、デート作戦したこともあった。

いつも嬉しそうに並ぶ二人。誰が見たってお似合いの二人。別れちゃって良いの？

愛し合ってた二人なのに…

涙が止まらない。

「あかね…起きてんだろ？」

乱馬の声が聞こえる。私は、袖で涙を拭くと、扉をあけた。

乱馬の手には、マグカップが二つ。

乱馬の優しさが幸せすぎて辛い。お姉ちゃんには、こんな幸せでいっぱいになって欲しかったのに…

「大丈夫か…」

「うん。ありがとう。」

「俺は、二人と一緒にいて欲しいって思う。愛し合ってるのに。」

「うん…」

「今は、かすみさんがそれを望んでないにしたって… かすみさんは、やっぱり先生のこと好きだよ。俺、先生の前でかすみさんが見せる顔、本気で綺麗って思う。あんな顔、先生の前でしかかすみさんは見せないよ。だから、いつか、かすみさんが先生に逢いたいって思えたとき、俺は協力してやりたいって思う…」

「乱馬…」

「だから、今は、そっとしておいてやろうな。辛いのは二人なんだから。」

乱馬は私をそう言っただけで抱き締めてくれた。

「乱馬… お姉ちゃん、幸せになるよね？」

「ああ。大丈夫だ。」

今、お姉ちゃんに対して、何もできない悔しさがある。

今まで、お母さんの代わりに私に色々なこととしてきてくれたお姉ちゃんに何も私はしてあげることがないの？

お姉ちゃん…

私、何もできないけど、お姉ちゃんが先生に逢いたくなったらいつでも言っただけ。

そんなことしかできない私だけ…

みんな、みんな、お姉ちゃんのこと大好きだからね。

12、不安

「あかね、かすみさんに余計なこと言うなよ。」

「分かってるわよ。しばらくは、口出ししないでって約束でしょ。」

翌日、私達が病室に入るとお姉ちゃんは、静かに本を読んでいた。

「あら、乱馬くん、あかね…」

本をパタンと閉じると、お姉ちゃんは微笑む。

「かすみさん、マフラーありがとうございました。暖かいです。」

「12月ですもの、そろそろマフラーがないと辛いでしょ。」

「はい。昼間は良くて、朝晩は冷えます。」

お姉ちゃんは「そう」と言いながらゆっくり頷く。

「あかね、お願いがあるんだけど…」

帰り際、かすみお姉ちゃんが私に声をかけた。

「どうしたの？」

「これ、東風先生に返しておいて。」

お姉ちゃんは、ネックレスにしていた婚約指輪を机に置いた。

9月に婚約をして以来、ずっと付けていた指輪。でも、お姉ちゃんの具合が悪くなると、指輪は大きくなってしまった。東風先生はすぐにチェーンを買ってきて、ネックレスにしてくれた。

あのとのお姉ちゃんの嬉しそうな顔を思い出す。

「良いの？」

「うん。お願いね。」

私は、指輪を受け取ると「帰りに返してくる」と小物ケースに入れた。

病院をでると、もう日が暮れて寒くなっていた。

「なあ、あかね…気付いたか？」

「え…」

「かすみさん、先生って呼んだだろ。」

「あ、うん…本当に別れちゃうつもりなのかな…」

「んなわねえだろ。強がってるだけだつて。その指輪も…」

「うん、ねえ、渡しちゃって良いのかな？」

「しょうがねえだろ。かすみさんが渡してくれっていったんだから。」

「それしかできないというのが今の結論だった。」

私達は、小乃接骨院の診療時間が終わるのを待って、中に入った。消毒の匂いがほのかに残る診察室。

「やあ、あかねちゃん、乱馬くん。」

先生は、クルリと椅子を回し、私達を見ると優しい目で微笑んだ。

「病院の帰りかい？」

「はい。あの…お姉ちゃんから預かってきたものがあつて。」

私は、先生にお姉ちゃんの指輪を手渡した。

「わざわざ、ありがとう。」

先生は、指輪を大事そうに握った。

「この指輪ね、買ったとき、なんて細い指だつて思ったんだ。これも大きくなっちゃつて。」

「先生…」

「ごめん、湿っぽいな。」

「こつちこそ、すみません。」

「良いんだ、終わったことだから。」

先生…そんな顔して笑わないで。お願い…

「じゃ、先生帰りますね。お父さん達待ってるし。」

「ありがとう。」

飛び出すように診察室を出た。後から乱馬が追ってくる。

「あかね！」

「ごめん…なんか、頭ん中ぐっちゃぐちゃになって…」

「分かるよ。大丈夫か？」

「ごめん。」

乱馬は、私の手を握ってくれた。それだけで、温かい気持ちになれる。

これから先どうなっていくかわからない…

13、魔の手

二学期最後の日、終業式を終えて三人で病院に向かった。

病室の周りが少しだけ騒がしい。

廊下でお父さんがオロオロと立っていた。

「お父さん、どうしたの？」

「ああ、おまえ達来てたのか？」

「お姉ちゃん……」

「かすみ、風邪を引いちゃったみたいなんだ。今、処置してもらったから大丈夫だ。」

「そつ、……で、お姉ちゃんは？」

「着替えてるよ。」

看護士さんが扉を開けてくれ、私達は中に入った。お姉ちゃんは、顔が赤く、呼吸が苦しそう。

「心配かけて、ごめんなさい。」

「良いんだ、今は苦しくないか？」

「ええ。」

お姉ちゃんはケホケホと咳をする。ゆっくり息を吐きながらこめかみに手を当てるのを見ると、頭痛もひどいみたい。

「お姉ちゃん、少し寝たほうが良いよ。」

「そうだな、少し寝なさい。」

なびきお姉ちゃんが、お姉ちゃんの布団を掛け直しながら、「寒くない？」とか「欲しいものはあるか」と聞いていく。「大丈夫」と答えが返ってくると、「じゃ、ゆっくり寝て」とカーテンを敷いた。お姉ちゃんは、薬が聞いてきたのか、すぐに寝入ってしまった。

「……天道さん。少し、お話があります。」

「あ、はい……」

乱馬を残して、私達は病室を出た。

「お座りください…」

診察室にはもう二枚の写真が張り出されている。

お姉ちゃんの心臓の写真だと一目で分かる。

「こちらの写真ですが、昨日撮った天道さんの心臓です。で、こちらが三週間前のものです。大きくなっているのが分かりますか？」

「…はい。」

「特に左側が大きくなってますね。全身もむくんでいますし、肝臓も腫れてしまっています。大変、危険な状態です。次に発作が起きると、心不全などを起こし、最悪の場合、死に至る可能性があります。」

「そんな…なんとかしてください。先生！！私の心臓を使ってください。あの子が助かるなら、何でもします。」

「天道さん、我々としても、最善を尽くしたいと思っています。まず、薬を変更します。副作用が強いですが、これによって、むくみや、腫れを緩和できると思います。そして、心臓がうまく送り出せない血液も薬によって送り出します。」

「…それで、娘は大丈夫なんですか？」

「断言はできません。できるだけ、発作が起きないように今は薬で抑えるしか方法はないんです。」

「よろしく願います。」

お父さんは、これ以上聞いても、お姉ちゃんの具合が良くなるわけではないと思ったのか、諦めた顔をして、頭を下げた。

「なびき、あかね…先に病室に行つてなさい。」

診察室を出て、お父さんは「トイレに行ってくる」と反対に歩き出した。

病室に戻ると、お姉ちゃんはぐっすりと寝入っていた。

怖い…このままお姉ちゃんが起きないんじゃないかって思う。
きれいな寝顔のまま、目を覚まさないんじゃないかって。

お父さんが戻ってきたのは、20分後だった。目が腫れている。

乱馬は、薄々何があったのか理解したみたいで、何も言わず私達にお茶を淹れてくれた。

お父さんは一口飲むと、椅子に座って、お姉ちゃんの手を握った。

「小さい時から風邪もあまり引かないような子だったのに…」

と呟いた。そして、「ごめんな」と唸るように言葉を吐き出す。

「お父さん…お姉ちゃん、起きちゃうから帰ろう。」

なびきお姉ちゃんはお父さんの肩を抱き、立たせた。

帰りの道、私達は誰一人として話をしなかった。

火の消えたような家で、おじさまが一人ご飯を作って待っていてく
ださった。

味なんて分からない。多分、みんながそうだった。

せめて、お姉ちゃんが今日よりは楽に明日を過ごせますように…

私には祈るしかなかった。

14、急変

「お姉ちゃん、今日はね、クリスマスツリー買ってきたよ。」

熱で少しボーっとしているお姉ちゃんが「ありがとう」と小さな声で呟いた。瞳を動かすたびに目の潤みが増すように思える。

三日後はクリスマスイブ。ツリーを病室に飾ろうと思いつながら、なかなか思うツリーが見つからず、昨日、やっと真白のクリスマスツリーを見つけた。大きさも丁度良い。

「お姉ちゃん、何か欲しい物ある？」

最近、お見舞いに行くと、なびきお姉ちゃんはそればかり聞いている。

「大丈夫よ」決まってお姉ちゃんの答えはそうだ。

付き添いは、私とお姉ちゃんが中心になった。着替えとか、気分が悪くなったときに擦ってあげるのは、女同士の方が良いだろうってことになって。お姉ちゃんは、薬の副作用がひどくて、常に吐き気がする状態らしい。顔色も悪くて、本当に薬が効いているのかと聞きたくなる。

「お姉ちゃん、スープだけでも飲もうか。」

熱で食欲が全くないお姉ちゃん。吐き気がするから、食べ物も受け付けない。それでも、食べなきゃ、体力が落ちていつてしまう。

今のお姉ちゃんは、寝ていた身体を自分で起こすのも辛そうだ。私は、お姉ちゃんの腰に手を回し起き上がるのを手伝う。驚くほど細くて、骨を皮しかない身体。なびきお姉ちゃんはスープをかすみお姉ちゃんの口に入れていく。

「なびき、ありがとう、もう十分よ。」

半分も飲まないうちに、お姉ちゃんは首を振った。

「分かった。じゃ、横になって。」

お椀を横に置くと、なびきお姉ちゃんのかすみお姉ちゃんの背中をゆっくり擦ってあげた。そうすると、しばらくして静かな寝息が聞こえてくる。

この繰り返しが一日、また一日…と過ぎていく。

街中がイルミネーションで華やぎ、クリスマスソングに包まれるクリスマス。

私となびきお姉ちゃんは、かすみお姉ちゃんのためにプレゼントを買い、昼間から病室にいた。プレゼントはニットの帽子とストール。「もう少し、元気になったら、また外に行こうね」と言うと、「そおね。久し振りに外の風に当たりたい」と微笑んだ。薬が慣れてきたのか、副作用が減ってきて、お姉ちゃんは少しだけ元気になった。昼ご飯のお粥もスープもほとんど食べた。

トントン…

6時を過ぎた頃、病室がノックされた。

「はい。」

私は返事をするので扉を開けた。そこには乱馬が立っていた。

「入って大丈夫か？」

「うん、今、お姉ちゃん起きてるから。」

乱馬は私に乾いた洗濯物を渡すと、カバンから「プレゼントです。マフラーのお礼…」と言い箱を渡した。

「あら、ありがとう。開けても良いかしら？」

乱馬が頷くのを確認し、細い指で紐を解く。中には、小さなぬいぐるみが入っていた。

「子どもっぽいかもって思ったんですが…」

恥ずかしそうに言葉を出す乱馬。

「とっても可愛いわ。乱馬くん、ありがとう。」

「そうね、あんたにしちゃ良い趣味よ。」

なびきお姉ちゃんはそう言いながら、クマのぬいぐるみをツリーの横に飾った。

「…あかね、今日はもう良いわよ。ありがとう。クリスマスなんだから、乱馬くんと遊びに行っておいで。」

「でも…」

「私なら、もう薬の副作用も少なくなってるし大丈夫よ。一年に一度しかないクリスマスなんだから…」

「そうね、お姉ちゃんには私が一緒にいるから、あかね行っておいでよ。」

「あら、なびきも…!!うッ!!!!」

それまで、なんともないように談笑していたお姉ちゃんが急に胸を押さえた。咄嗟のことでみんなすぐに状況が判断できない。

「お姉ちゃん、どうしたの? 苦しいの?」

「大丈夫よ、ちょっと休めばすぐ治るから。」

お姉ちゃんは、眉間に皺を寄せながら口角だけを上げた。

「…あ、あかね、だい…じょ、うぶ…だか、ら…」

「お姉ちゃん、しゃべっちゃ駄目。分かったから、しゃべらないで。」

なびきお姉ちゃんは背中を擦りながら何も考えなくて良いと言った。乱馬の押したナースコールで先生が来た。かすみお姉ちゃんは、私の目を見つめたまま苦しそうに呼吸している。

「お…う…お…う…」

「お姉ちゃん、どうしたの?」

私は、お姉ちゃんの口元に耳を近づける。

「……………」

「ご家族の方、外でお待ちください!」

お姉ちゃんの声が聞こえるのと、看護師さんの叫び声は同時だった。でも、はつきりと私の耳に聞こえた。

涙が止まらない。

「あかね、どうしたの？お姉ちゃん、何て？」

「東風さんって、先生の名前、呼んでた。助けてって。」

お姉ちゃん、やっぱり先生のこと忘れてなかったんだ…

「あかね、行くぞ！！」

乱馬は、私の言葉を聞いて私に「東風先生のところへすぐ行く」と言った。

「なびき、一人で大丈夫か？」

「大丈夫よ、お父さんにも病院から連絡してくれたみたいだから。東風先生のこと、頼んだわよ。」

なびきお姉ちゃんが気丈に笑って私の顔を見た。私は頷くとすぐに病院を出た。

お姉ちゃん、東風先生呼んでくるよ。

…だから頑張って。

タクシーの中、乱馬に手を握られながらずっと祈っていた。

15、愛し君

「東風先生!!」

診察室の看板は『休診』と出ている。今日は、土曜日だから、午前診察だったのだ。

扉を二人で思いつき叩く。

「はい」

奥から先生の声が聞こえ、ガラガラと扉が開く。私達の目の前に現れた東風先生はひどく痩せていた。

「先生！早く来て!!」

「どうしたんだい？」

先生の顔色は明らかに変化した。きつと、お姉ちゃんのことだつて気付いたけど、受け入れたくないから尋ねたんだろう。

「お姉ちゃんが…お姉ちゃんが…」

「かすみさんが発作起こして苦しんでるんだ。」

「え…」

「先生のこと呼んでるの。助けてって言ってた。」

「あかねちゃん、でも、かすみさんは…」

「先生！かすみさんが本気で別れようって言ってんじゃないの分かっているだろ！先生だつてかすみさんのことまだ好きなくせに！」

「乱馬くん…」

「もう十分だろ、呼吸するのも苦しい中で先生の名前を呼んだかすみさんを見てたら分かるよ。やっぱり別れたくないんだつて。今度は先生の番だぜ。」

先生は一瞬、唇を噛むと「ありがとう。そうだね。」とはっきりと言ってくれた。

タクシーの中で「病院で次に発作が起きると危ないって言われてた」

つてことを伝えた。

先生は、顔を手で覆い、深い息を漏らした。

先生の左手には、まだ指輪がはめられていた。

病室の前で、お父さんとなびきお姉ちゃんが座っていた。お父さんは東風先生の顔を見ると、立ち上がり頭を下げた。

「ありがとう。」

そう言っているのが分かった。

「お義父さん…」

「こちらの都合で振り回すような形になって申し訳ない…」

「いえ、それより、かすみさんは…」

「非常に危険な状態だそうだ。」

「今、ICUで治療中だけど、お姉ちゃんの心臓、かなり弱ってるみたい。」

「天道さん…」

先生が私達に声をかけてきた。疲れた表情を一瞬見せたけど、私達の顔を見ると、ゆっくりと笑顔を見せた。

「どうにか、落ち着きました。しばらく、ICUで様子を見ます。」

「大丈夫なんですか？」

「危険な状態に変わりはありません。今度いつ発作が起きてもおかしくはありません。でも、今のところ、大きな問題はありませんよ。顔色も回復してきましたし、心拍数も安定しています。」

「そうですか…」

「あの…婚約者の方ですよ、ね…」

先生は急に東風先生に声をかけた。

「え、あ…はい。」

「天道さんが呼んでいますよ。うなされながら、あなたの名前を…」
「え…」

「手を握ってあげてください」先生はそう言うと、ICUまで案内してくれた。私達も後ろをついていく。

「お父さん、かすみさんが目覚めたら、改めてプロポーズして良いですか？」

「ありがとう。良い息子を持てて本当に嬉しいよ。」

東風先生は、お父さんに一礼すると病室に入って行った。

私達はガラス越しにお姉ちゃんの様子を見る。いつぱいの機械に囲まれて、酸素マスクも付けているお姉ちゃんは苦しいはずなのに、東風先生に手を握られ、安心した表情をしていた。

東風先生の目は優しさに溢れていて、何があってもこの手は放さないという自信に満ちていた。

「先生、少し休憩しますか？」

日付が変わってしまっても、先生はお姉ちゃんの手を握り続けた。

私は、先生の背後から声を掛けた。

「あかねちゃん…大丈夫だよ。」

「でも、ずっとじゃ…」

「良いんだ。もう、一ヶ月かすみの傍にいなかったんだから。それより、ありがとうね、あかねちゃん。僕を呼びにきてくれて。」

「え…」

「こんなことがなかったら、ずっとかすみに会えず、気持ちも伝えられなかったと思うよ。」

先生は、お姉ちゃんの寝顔を愛しそうに見つめた。「あかねちゃん、いつも僕達のキューピッドだね」って苦笑いしながら。

「先生、お姉ちゃんのこと、ずっと愛してくれるんですね。」

「うん。約束するよ。何があつたって、僕はかすみを愛したいって思う。」

涙が止まらなかった。

朝日が昇る。

二人の再会はきつと…もつすぐ…

16、もう一度

七時を過ぎた頃、お姉ちゃんが目を覚ました。
東風先生の顔を見ると、目を見開く。

「お姉ちゃん、東風先生が来てくれたのよ。」

かすみお姉ちゃんはオロオロと目を泳がし、私の顔を見つめた。「
どうして」って言うてるみたいだ…

「かすみ…詳しいことはあとだ。今、先生が来て下さるから診てもらって、それからだ。」

お父さんは、そう言いながら「どこか苦しいところはないか」と尋ねた。酸素マスクをしているお姉ちゃんは、首を振って答えた。

「じゃ、外で待ってましょ。」

なびきお姉ちゃんが私達の背中を押す。

「じゃ、後で…」

東風先生も、かすみお姉ちゃんにそう言って外に出ようとした。

その時だった…

ギョツとかすみお姉ちゃんが東風先生の手を強く握った。

東風先生が驚いて、かすみお姉ちゃんを見ると、恥ずかしそうに視線を外した。東風先生は私達にコクリと頷くと、小さな椅子にそのまま腰掛けた。

二人を残して、私達は外に出た。先生の診断の結果、お姉ちゃんはいつもの病室に戻るようになった。お父さんが二人つきりにしようと言ったので、それに従った。夕方になっても、あまり会話をしない二人だけど、決して手を放そうとしなかった。それだけで、充分だった。

その日の夜、お父さんに話があると東風先生が家にやってきた。

「かすみさんと結婚させてください。」

先生は、半年前と同じように、お父さんに向かって頭を下げた。ただ、一つ違うのは隣にお姉ちゃんがないということだった。

「東風くんには、迷惑かけてすまない…君がかすみをそこまで愛してくれて、これほど嬉しいことはないよ。かすみの力になってください。」

お父さんも頭を下げる。

東風先生は、頭を上げ、カバンから一枚の紙を出した。

『婚姻届』

「明日にでも籍をいれようと…式はかすみさんの調子が良ければ予定通り春に…もちろん、挙式だけの簡単なものです…」

お父さんは何も言わず婚姻届を見ている。「お許しをいただければ、明日にでも入籍しようと思います。」と先生は付け足した。

「親として、あのこを幸せにできるのは東風くんしかないと思っている。君を息子にできて、幸せだよ。」

「では、明日にも…」

「そうだな。わしが付き合おう。」

お父さんは嬉しそうに目を細めた。

深夜、私は目が覚めて一階に降りた。冷蔵庫から牛乳を出して温める。ふと、お父さんの部屋から光りが見えた。不思議に思っつくりと襖を開ける。お父さんは、仏壇を見ながらお母さんに何かを話していた。

「母さん…明日かすみが籍を入れるそうだ。あの子が嫁ぐことなんてもうないだろうと正直、諦めていたのに。嬉しい限りだ。このまま二人の愛が病に勝ってくれるのではないかと思っている。だから、

母さん、かすみがそっちの世界にいかないように守っていてくれ。」

お父さんは静かに仏壇に向かって手を合わせた。

明日からお姉ちゃんは「小乃かすみ」になる。

先生と手を取り合って、もう一度歩みなおす…

17、証

翌日の夕方、お姉ちゃんの病室には全員が集まった。大学進学が早々に決まったなびきお姉ちゃんが、バイトで貯めたお金でビデオカメラを買ってきて、今日の記念すべき日を記録している。

東風先生の姿が、まだない。診察時間が長引いているのだろうか。

トントンとノックされ、扉が開く。

「遅くなつてすみません。」

先生は、そう言つて中に入る。

「お義母さま…」

先生の後ろには東風先生のお母さんが立っけいらつしやつた。

「かすみさん、調子はどうだね？」

「ご心配おかけしてすみません。今は、安定しています。」

「お見舞いに来ようと思つていたんじゃが、なかなか来れずすまなかつた。」

「いえ、お氣を使わないでください。」

「ほらほら、母さん、今日はそんなことよりも…」

「分かつておる。」

東風先生は、カバンから婚姻届を出した。お姉ちゃんが、お父さんの顔を見ると、お父さんは何も言わず頷いた。

まず、先生が書いて次にお姉ちゃんが隣に書いた。お姉ちゃんらしい丁寧な文字が、先生のしっかりとした字の隣に並んだ。

「天道さん…改めまして…大事な娘さんをいただきます。」

「お義母さま…ご承知のとおり、私は今、この身体ですから東風さんの妻として、何もしてあげられることができません。お義母さまにも迷惑をかけると思います。でも、少しでも早く元氣になつて二人で歩いていけるよう頑張ります。」

「かすみさん…無理はすることない。夫婦なんだから、助け合って生きていけば良いのだから。」

先生のお母さんは、お姉ちゃんの手を握り「ゆっくり、自分のペースで治療していけば良い」と言ってくれた。お父さんは、嬉しそうに二人の手を見つめている。

「そうだ…かすみ、左手を出して。」

東風先生は、カバンから小箱を取り出し、蓋を開けた。

中には、お姉ちゃんが先生に返した指輪がしまつてあった。

「急いで、サイズを変えてもらったんだ。」

先生は、そう言つて、お姉ちゃんの薬指に指輪をはめた。

「ぴつたりだ…」

先生はお姉ちゃんに笑いかける。「ありがとう」お姉ちゃんの微笑みで、病室が明るくなった。

「ね、お姉ちゃん指輪見せて…」

ビデオを構えていたなびきお姉ちゃんがカメラをお姉ちゃんに向ける。

かすみお姉ちゃんは恥ずかしそうに左手を挙げた。

「先生も、隣に。」

「やあ、恥ずかしいなあ。」

東風先生は、ベッド脇に腰掛けると、お姉ちゃんに並んで指輪をカメラに向けた。

カメラを向けているなびきお姉ちゃんの顔はとても嬉しそうで、いつも冷静で表情を変えないお姉ちゃんが満面の笑みを浮かべている。お父さんは少し涙ぐんでいる。

「良かったな…」

乱馬が私のところにやってきて、呟いた。

「ね、良かった…」

東風先生、お姉ちゃん…
お幸せに…

18、希望

「あかね、ちよつと病院に顔出してくるから。」

「もう面会時間過ぎてるじゃない。お姉ちゃんに何かあったの？」

「いや、先生から話があると連絡をもらつて。東風くんも呼ばれたみたいだ。」

「そう、何かしら？気になるわね。」

「うむ：最近のかすみは薬も効いて散歩ができるまで回復しておるのに、何があつたんかなあ」

「こんばんは。」

東風先生の声がして、お父さんは出かけて行つた。

戻ってくるまで、私は落ち着かなかつた。

「あかねちゃん、大丈夫じゃよ。」

おじさまが、お茶を淹れてくださる。

「ありがとうございます。」

居間でゆつくりと過ごしていると、お姉ちゃんと乱馬が続けて帰ってきた。お父さんが病院に行ったことを伝えると険しい顔になった。

「ただいま……」

お父さんの声。いつもと変わらない声だ。一緒に東風先生も帰ってきた。

「お姉ちゃん、何だつて？」

「手術を勧められたよ。」

「手術？」

「ああ、入院した時は体力もなく、不整脈があつて手術もできなかったが、年末あたりから薬が効いてきたから、手術をするなら今だそつだ。これを逃すと心臓が大きくなりすぎて、無理だから今が良

「らしい。」

「それで、お姉ちゃんが完全に治るの？」

「いや、完全じゃないよ。前にも言ったが、完全についていうのは、移植の道しかない。でも、それは難しいから、手術で悪くなった心臓を切り取ってしまうというものらしい。」

「最近では、けっこう有名な手術で、成功率も高いんだよ。成功すれば、かすみの生活もグッと楽になると思うよ。なにより、退院できるからね。」

「本当ですか、先生？」

「うん。もちろん、病院には行かなきゃいけないし、普通の生活とまではいかないけど。」

私達にとって夢のような話だ。

「で、いつ手術するの？」

「早い方が良いらしい。とりあえず、明日、検査をしてみるらしい。かすみには、その後話しをして、手術をするか決めるらしい。」

「そしたら、冬は越せるの？」

冬を越すことは奇跡と言われていたお姉ちゃん…

なびきお姉ちゃんは忘れていなかったのだ。

「成功すれば、可能性は高い。先生は、手術できるまで回復したことが奇跡だとおっしゃっていた。」

「すごいね、お姉ちゃん…」

「先生の愛の力じゃない」

「なびきちゃん、そんな…」

「いえ、本当に東風くんのお陰だ。籍を入れてからのかすみの容態は良くなっている。君のお陰だよ。」

お父さんも嬉しそうだ。

「東風くん、かすみの手術が成功して、退院が決まったら一緒に飲もう！相手をしてくれ。」

「はい。ぜひ…」

お父さんは、誕生日にお姉ちゃんが注いでくれたビール以来、飲んでいない。お父さんの禁酒解禁もきつともうすぐだ。

お姉ちゃんの手術が決定したのは、翌日の夕方だった。手術は一週間後。

五時間くらいかかるものらしい。病院で聞いた注意事項をお父さんから聞いて私達も手術に備えた。

手術当日 私達は、学校を休んで付き添う。

朝から、お姉ちゃんは点滴を打っていた。東風先生が手をずっと握っている。

「母さんが来たいと言っていたんだけど、あまり人数がいても、かすみが疲れるからと実家にいてもらっているよ。頑張るようになってほら、お守り。」

「東風くん、お母さんに気を使わせてすまないね。」

「いえ、落ち着いたらこっちにも来たいと言っていました。」

「ありがとうね。」

「小乃さん、そろそろ移動しましょうね。」

「あ…はい。」

「かすみ、大丈夫だよ。頑張っておいで。目を覚ましたら前より楽になるからね。」

「お父さん、ありがとう。」

「お姉ちゃん、いつてらっしゃい。」

私達も次々と声をかける。

「ありがとう。」

お姉ちゃんの声はいつもと変わらず落ち着いている。

「さ、かすみ、みんな待っているから。」

先生は、お姉ちゃんの手を強く握ると「怖くないよ。みんな、付いてるから」と励ます。

「ありがとうございます。」

お姉ちゃんは先生に微笑むと病室を出て行った。

手術中のランプは五時間以上灯ったままだ。

誰も言葉を発することがなく、時間が過ぎていく。

「おじさん、おにぎりです。良かったら……」

乱馬がおにぎりを作って持ってきてくれた。

「ありがとうございます。さあ、みんな食べよう。まだ、時間がかかるみたいだし。」

「……でも。」

「なびき、今食べておかないと、かすみの手術が終わったら、忙しくて食べる時間がなくなる。一つ食べておきなさい。」

なびきお姉ちゃんも、手を伸ばした。

おにぎりを食べ終え、少しだけ気持ちがホッとした。

手術が終わって、人工呼吸器を付けたお姉ちゃんが出てきた。麻酔が効いていて、目を閉じたままだ。話しかけてはいけけないと言われていたので、声をかけてい気持ちるをぐつと堪える。

「手術は成功です。今夜遅くか、明け方に目を覚めますよ。もう少ししましたら、一度、面会をしていただけます。」

「ありがとうございます。」

お姉ちゃんの手術が成功したのだ。

私達は、15分だけ、ICUでお姉ちゃんに会って帰った。

お父さんと東風先生が付き添っている。夜中でも、目が覚めたら、連絡が入るようになっていた。どうせ、今日は眠れそうにない。お

じ様が作ってくれた夜食を食べながら、お姉ちゃんの手術が成功したことを伝えた。おじ様も嬉しそうだ。

3時を回ったこと、お父さんからお姉ちゃんが目覚めたと連絡がきた。

背中が痛くて、苦しんではいるが、意識はしっかりしているのとのことだった。

明日には、色々な管が抜けるらしい。

「さ、私達も寝ましょ。明日、学校だから。」

お姉ちゃんはさっぱりとした顔でそう言っと、各自の部屋に入った。久し振りにグッスリ眠れそうなるだった。

19、満開

お姉ちゃんの手術から一週間経ち、私達はやっと面会が許された。手術前に比べて顔色が良くなっている。手術をしてからしばらくは、腰の痛みで眠れなかったらしいけど、最近はきちんと眠れるらしい。「同じフロアなら、歩いてもいいんだよ。もうすぐ、階段の昇り降りもリハビリに入るらしいよ。」

東風先生は嬉しそうに笑っている。お姉ちゃんの身体には、もう点滴の針しか刺さっていない。

「良かった…」

私は椅子に座ると、お姉ちゃんの顔を見つめた。食事が取れるからか、お姉ちゃんの頬は少しだけ、ふっくらと丸みを持った気がする。「あと、三週間くらいで、退院できるみたいなのよ。」

「本当!？」

「ええ。今のところ、順調みたい。」

「やっと、新婚さんらしい生活ができるね。」

「フフ…そうね。」

お姉ちゃんは、先生の顔を見るとニツコリと微笑んだ。

「小乃さん、リハビリのお時間ですよ。」

看護師さんの声に「はい」と返事をする、ゆっくりとベッドから降りた。手術前は、自分でベッドから身体を起こすのも辛かったなんて、信じられない。

お姉ちゃんが出て行った病室で、先生と二人きりになった。

「あの、あかねちゃん…」

「何ですか？」

「二人で話し合ったんだけど、かすみが退院したら、結婚式までかすみを天道家で過ごさせたいんだ。」

「え…だって、もう入籍してるんだし。」

「かすみが、ちゃんと家族で過ごしたいって。生まれ育った家から嫁ぎたいって。」

「そうですね…じゃ、ちゃんと掃除しておきますね。」

「ありがとう。」

「こちらこそ。二人きりの生活はしばらくお預けですね。」

「まあね。でも、結婚式まで本当にすぐだし。」

お姉ちゃんの体力も考えて、挙式だけの結婚式になった。内輪だけの簡素な式だ。でも、先生もお姉ちゃんもとても楽しみにしている。

「桜、満開になると良いですね。」

「そうだね。かすみが望んだ桜だし。」

「今年は少し桜が咲くの遅いみたいだから、間に合いますよ。」

満開の桜が咲く頃、きつとお姉ちゃんにも満面の笑みが生まれる。

先生と手を取り合って…

20、桜の下で

「とうとう明日ね。」

東風先生とお姉ちゃんの結婚式を明日に控え、なびきお姉ちゃんと二人で買い物に出ていた。

今日は、家族四人で過ごす最後の夜だ。

乱馬とおじさまは、私達に遠慮して、今日一日は、家を空けてくれた。

「お姉ちゃん、綺麗だろうなあ。」

「そりゃあね。東風先生、感動して言葉にならないでしょうね。」

「それは、お父さんも一緒でしょ。」

「お父さん、寂しそうだけど、嬉しそうだね。」

「そうだね。」

お姉ちゃんが退院してからの一カ月近く、お父さんとお姉ちゃんはいつも一緒にいた。東風先生もなるべく、用事があるとき以外は、二人に遠慮していたみたい。娘が嫁ぐってこんな感じなのかな…と漠然と思うようになった。

夕食は、お父さんの好きなきんぴら牛蒡、なびきお姉ちゃんの好きなレンコンのはさみ揚げ、私の好きなカボチャのサラダが並んでいた。

「この味もしばらくは食べれないなあ。」

「そうだね。」

「やだ、いつでも作りに来るわよ。」

こんなやり取りは、私たちの日常だった。お母さんが亡くなってから、ずっと私たちのために家事をしてきてくれたお姉ちゃん。だけど、明日から、お姉ちゃんはこの家を出て、東風先生と新しい家族を作る。寂しいけど、やっぱり嬉しい。不思議な気持ちが私を包んでいた。

翌日は、真青な空がお姉ちゃんたちを祝福してくれた。

街のはずれにある小さな教会。クリスマスになると、牧師さんがお話を聞かせてくれて、よくお母さんに連れて行ってもらった思い出の教会。ここで、挙式を挙げる。

乱馬とも合流をし、私達はお姉ちゃんの支度ができるのを待っていた。

お姉ちゃんのドレスは、お母さんが着たものだ。まだまだ和式の結婚式が多い中、母さんはこのドレスを着たのよと、写真を見せてくれた。

「お支度できましたよ。」

お姉ちゃんは、私達に背を向ける形で座っていた。

「すごく綺麗ですよ。」

スタッフの人は、笑顔で私達を迎え入れる。

「お姉ちゃん…」

私の呼ぶ声にゆっくりと顔を上げた。「うわぁー」と思わず声を漏らした。すごく綺麗だった。汚れをしない、神々しい顔。例によってなびきおねえちゃんは、ビデオカメラを回している。

「お姉ちゃん、綺麗。」

「ありがとう。」

うつすら瞳に涙を浮かべて、お姉ちゃんは微笑んだ。

「お父さんは？」

「今、先生のお母さんに挨拶してる。すぐに来ると思うよ。」

そう言っていると、お父さんが入ってきた。お姉ちゃんの姿を見て、言葉を無くした。その場で立ち尽くす。

「ほら、お父さん、早くこっちに。」

なびきお姉ちゃんに手を取られ、お父さんが近付く。

「かすみ…綺麗だよ…」

お父さんの顔は、優しさと切なさが混ざった表情だった。

「お父さん…ありがとう…お父さんの子どもで良かった…」

お姉ちゃんは呟くように言うと、お父さんの顔を見てニッコリと微笑んだ。

「父さんも、かすみと過ごせて幸せだった。今まで迷惑もかけたのに、文句も言わず頑張ってきてくれてありがとう。無理だけはしないで、東風くんと二人でウンと幸せになりなさい。今まで以上に…」

「ありがとう。」

お姉ちゃんの頬には涙が流れていた。白いハンカチをスツとなびきお姉ちゃんが差し出す。

そのお姉ちゃんの頬にも一筋、光るものが流れていた。

教会のステンドグラスから、綺麗な陽がこぼれるなか、お父さんとバージロードを歩くお姉ちゃん。東風先生の顔を見ると、ニッコリと微笑んだ。お父さんが、お姉ちゃんの手を東風先生の手に乗せる。お父さんは、そつと下唇をかみ締めていた。

式が終わると、先生とお姉ちゃんは庭に出た。風が吹くたび、桜の花がチラチラと舞う。

東風先生の親戚の人と楽しそうに話す二人をお父さんは、少し離れて目を細めて見ていた。

「お父さん…」

声をかけると、お父さんは「あかね…」と微笑んだ。

「お姉ちゃん、体調良さそうだね。」

「安心したよ。熱でも出たら台無しだからな。」

そんな話をしていると、なびきお姉ちゃんが「あかねー」と私の名前を呼んだ。

お姉ちゃんがブーケトスをするらしい。

「お父さん、行ってくるね。」

「ああ、行っておいで。」

「安心して、私が嫁ぐのはもう少し後だから。」

「え？」

「お父さん、今日、父親の顔してるよ。暫くは、その気持ちにならなくても良いようにブーケは取らないからね！」

私はそう言っていると、青空の下を駆け、集団の中に混ざった。

でも、青空に、真白なブーケがポーンと飛ぶと、そのブーケが私の手にストンと入った。

お姉ちゃんは、私の顔を見るとゆっくりと微笑んだ。

女神様がみたら、こんな顔だと思う。穏やかな笑顔だった。

21 分岐点

お姉ちゃんと東風先生の新婚生活は、穏やかで静かで、傍から見れば新婚らしい初々しい感じは全くなかったと思う。

でも、二人はいつも一緒にいて、それだけで幸せそうだった。

時々、商店街のおばちゃんが、「あかねちゃん、今日ね、かすみちゃんと東風先生が買い物に来てくれたのよ。かすみちゃん、顔色が良くなったね。」なんて声をかけてくれる。早くにお母さんを亡くした私達は、商店街の人たちにすごく優しくしてもらって育った。特に、かすみお姉ちゃんは、よく買い物に行ってたから、みんな娘のように思っている。

「あ、お姉ちゃん!!」

商店街で買い物を終えて、家に帰ると、ちょうど門のまえにかすみお姉ちゃんが立っていた。東風先生はいなくて、一人みたい。

「あかね。買い物?」

「そう。今日は、炒飯でもやろうかと思って。」

私は、お姉ちゃんと家に入ると、お姉ちゃんは「お母さんに挨拶してくる」って奥部屋に入って行った。

居間でお茶を飲んでいたお父さんは「かすみ来たのかい?」と私に尋ねた。

「奥にいるよ。すぐ来ると思う。」

私はそう言いながら買ってきた荷物を冷蔵庫に入れていく。

それが終わり、お茶を淹れると居間に戻った。だけれど、かすみお姉ちゃんの姿はまだなかった。代わりに大学から戻ってきたなびきお姉ちゃんが新聞を読んでいた。

「お姉ちゃん、遅いわね。」

お茶を出すと、お父さんは「そうだな。」と一口お茶を飲んだ。

お父さんに二杯目のお茶を淹れた頃、お姉ちゃんが戻ってきた。お父さんの姿を見ると「邪魔してます。」と穏やかに微笑む。

「ゆっくりしてきなさい。」

お父さんの言葉にコクリと頷くお姉ちゃん。ゆっくりと湯飲みを両手で包んだ。

「何かあったのかね？」

お父さんの言葉に「え…」とかすみお姉ちゃんの声が漏れた。私となびきお姉ちゃんは、思わず顔を合せる。

「さつき、東風くんから電話があった。」

「東風さんから？」

「かすみがそっちに行っていないかって…もし行ったら、何も言わず一晩泊めてやってくれって。」

「…」

「何も聞かないでおこうかと思ったが、お前があまりにも思いつめた顔をしていたから、心配になった。」

「お姉ちゃん、何かあったの？具合でも悪いの？」

なびきお姉ちゃんが口を挟むと「大丈夫。調子は良いわよ。」とお姉ちゃんは答えた。

「じゃ、先生と喧嘩でもしたの？」

私の問いかけにお姉ちゃんは、湯飲みに視線を移すとコクリと頷いた。

「原因は？」

「…」

お姉ちゃんが何も喋らないので、私達は誰も喋れなかった。

「…ちゃん…」

しばらくして、お姉ちゃんがポツリと呟いた。

「何？」

優しくなびきお姉ちゃんが聞き返した。

「赤ちゃん…」

「赤ちゃん？」

コクリと頷いてお姉ちゃんはポツリポツリと話し始めた。

「昨日ね、病院で読んだ本に私と同じ、拡張型心筋症の人が出産をしたって書いてあったの。それで、先生に聞いてみたら、今の私の状態なら出産は可能だって…でも…でも、…症例も少ないから、保障はできないって。」

お姉ちゃんは、ゆっくりと目を閉じると涙がこぼれた。

「それが喧嘩の原因？」

コクリと頷いたお姉ちゃん。

「かすみは産みたいのか？」

「…はい…」

「東風くんは？」

フルフルと首を振ったお姉ちゃん。それを見てお父さんは、フーッとため息をついた。

「…かすみ、すまんが、今度ばかりは東風くんの意見に賛成だ。子どもが欲しい気持ちは充分分かる。できれば叶えてやりたい。でも、お前の方が大切だ。…かすみ…東風くんがどれだけ、かすみのことを大切に思っているかは、かすみが一番よく知っているはずだよ。」
お父さんは、「今日は、何も考えずゆっくり身体を休めなさい。」
と言って、東風先生に電話を入れに席を立った。

「お姉ちゃん、大丈夫？」

なびきお姉ちゃんは、背中を擦ってあげながら、私に水を持ってくるように言った。

台所に水を取りに行くと「苦しいところない？」となびきお姉ちゃん

んの気遣う声が聞こえる。

「大丈夫よ。」意外にもかすみお姉ちゃんの声がしっかりしているのにホッとする。

「かすみ、東風くんに電話しておいた。明日、迎えに来てくれるそうだ。」

お父さんは私に「かすみのご飯も用意してくれ」と頼むと奥部屋に消えていった。

かすみお姉ちゃんは、お夕飯の支度を手伝ってくれた。何事もなかったように手を動かすお姉ちゃんの眼差しは、どこか寂しそうだった。

夕飯を終えて、かすみお姉ちゃんが私の部屋にやってきた。

「あかねなら、どうする…?」

「え…」

突然の質問に私は迷ってしまった。

「…私も産みたいって思うと思う。」

お姉ちゃんは、穏やかに笑うと「贅沢よね」って言った。

「病気がひどい時は生きていることだけで幸せだった。それが、東風さんと結婚できてもっと幸せになった…手術もできて、退院して、結婚式も挙げられた。これ以上、望むことなんてないと思ってた。でもね、子どもができると思ったら堰を切ったように欲しくなっちゃって…」

「分かるよ、お姉ちゃんの気持ち。」

お姉ちゃんは、赤ちゃんが欲しいって気持ちと、反対するお父さんや東風先生のお姉ちゃんに対する愛情の両方を受け止めて苦しんでいるみたいだった。

「今日ね、東風さんに言われたの。子どもがいなくてもかすみがい
てくれるだけで充分幸せだって。すごく嬉しかった。…なのに、子
どもが欲しい気持ちが変わらないの。」

「女だからね…」

そう言ったお姉ちゃんの横顔は、いつもの穏やかさの中に強さを持
った女の顔だった。

どんな試練でも乗り越えてみせるという表情だった。

しばらく黙っていたお姉ちゃんは「もう少し、東風さんと話合っ
てみるわ。」と言った。そして、「何かあったら、あかね、相談に乗
ってね。」と笑った。

「うん。私は悩み事聞くことくらいしかできないけど。」

「それで充分よ。ありがとう。」

お姉ちゃんは、落ち着いたのか少しスッキリとした顔をして部屋を
出て行った。

翌朝、東風先生がお姉ちゃんを迎えに来て、お姉ちゃんは帰って行
った。

「二人でよく話し合います。」

「その方が良い。二人で話し合った結果なら、父さんは反対しない
よ。」

お父さんは「体調だけは気をつけなさい。」とお姉ちゃんを気遣った。

東風先生が荷物を持つと、お姉ちゃんの方から、先生に手を伸ばした。先生は安心したかのように笑うと、お姉ちゃんの手を優しく包んだ。

「お邪魔しました。」

二人の後ろ姿を見ながらお父さんが複雑な表情を浮かべていた。

22、未来へ

「こんばんはー。」

あんなことがあつてから2週間。連絡もなかった東風先生とかすみお姉ちゃんが突然やつて来た。夏休みの宿題をやっていた私は、なびきお姉ちゃんに呼ばれ、居間に向かった。

「いらっしやい。」

私は二人に声をかけると、お父さんの横に座った。

「話し合いはできたかね？」

「はい。色々本で読んだり、病院で話も聞いて、最終的には二人で話し合つて結論を。」

「で、どうすることにした？」

「子どもが欲しいというかすみの気持ちを尊重していくつもりです。」

「じゃあ…」

「もし、これから夫婦として生きていく中で、子どもに恵まれたら、親になるうつつ決めました。」

お父さんは小さく「そうか…」と言った。

「たとえ子どもに恵まれても、かすみの命に影響が出る場合は、子どもは諦めるとかすみも納得しています。」

東風先生がかすみお姉ちゃんを見つめるとコクリと頷いた。

「子どもができた場合は今まで以上に食事とか健康に気をつけなくちゃいけないって先生に言われたわ。それに、自然分娩は無理だから、早目に帝王切開をすることになりそうだって。」

「薬はどうするんだね？」

「飲み続けなきゃいけないって。赤ちゃんに影響が少ないからって。」

「二人は、全てを納得して親になる覚悟をしているんだね。」

「はい…」

真っ直ぐな二人の瞳を見てお父さんは、穏やかな表情になった。

「二人がそれまで覚悟できているなら、二人で歩いていきなさい。
父さんは、応援しているよ。」

「お父さん…」

「東風くん、ありがとう。これから、かすみのことお願いします。
かすみ、身体のこと一番にして、東風くんに迷惑をかけないように
しなさい。」

「はい…」

お姉ちゃんと東風先生は顔を見合わせてニッコリと微笑んだ。

心の底から笑顔を浮かべるお姉ちゃんを見て、お父さんも満足そう
に笑った。

「それと…」

静かな声で東風先生が穏やかな空気を東風先生が遮る。一瞬にして
空気が固まる。

「いや…そんな…注目されても…」

ハハハと東風先生が笑って「これも、かすみと話し合ったんですが
…」と前置きをした。

「何だい？」

東風先生が、かすみお姉ちゃんに「君から話した方が良いよ」と促
した。

「あのね、旅行に行きたいの。」
「旅行？」

「そう。近場の温泉が良いかなって思っただけど、みんなで。」

「僕達の新婚旅行も兼ねて。」

「良いじゃない。花火の季節だしね。あかね！」

「そうね。お父さんどう？」

決断はお父さんに委ねられた。

「せっかく、二人が誘ってくれたし喜んで行こう。どこに行こうかねえ、東風くん！」

お父さんは子どものように笑った。

高校生活最後の夏休みが楽しい思い出になりそうで、私もとても楽しみだった。

23 想い

みんなが楽しみにしている旅行は、お盆すぎの1泊2日を利用して高原に決定した。東風先生が運転するワンボックスカーに乗りこんで、旅館に向かった。

「乱馬、あっちに可愛いお土産のお店があつたの！行こうよ。」

「ったく、お前は、可愛いものに目がねーんだから。」
文句を言う乱馬の手をとって向かいのお店に入る。

「おい、あかね…」

乱馬が急に止まって、私の手をぐいっと引つ張る。「ほら」と小声で指差した先には東風先生の姿。そして、先生の腕に自分の腕を絡ませ、甘えた笑顔を見せるかすみお姉ちゃんの姿があつた。
二人で、おそろいのお土産でも選んでるんだろうか。

「乱馬、あとでまた一緒に来て。」

「おう。そうだな。」

私達は、各々、買い物や散策を楽しみ、夕食をとると、お父さんたちの部屋にみんなで集まった。お父さんと先生、早乙女のおじさまはお酒を飲みながら楽しそうに言葉を交わしている。それを嬉しそうに見つめながら、微笑むかすみお姉ちゃん。

でも、しばらくするとお姉ちゃんもさすがに疲れたみたいで、ソファに身体を預け眠ってしまった。

「先生、お姉ちゃん寝ちゃいましたよ。」

なびきお姉ちゃんの言葉に、みんなお姉ちゃんに注目する。

先生は、お姉ちゃんに近寄ると額に手を乗せた。

「大丈夫かい？」

お父さんが心配そうに尋ねる。

「はい。ちよつと疲れたみたいですね。お父さん、すみませんが、今日はこれで…」

「長居をさせてしまつて悪かつたな。新婚旅行も兼ねていたのに。」

「いえ、かすみも楽しかつたようです。」

先生は、お姉ちゃんを抱き上げる。私も、お姉ちゃんの靴とかばんを持って、先生について行つた。

先生は、ベッドにかすみお姉ちゃんを寝かせると、布団をかけた。

「ありがとうね。あかねちゃん。」

「いえ、大丈夫です。お姉ちゃん、楽しそうでしたね。」

「うん。旅行なんて久し振りだつたみたいだから。」

東風先生は、カバンから薬を出すと、万が一に備えて、枕元に置いた。冷蔵庫からだしたミネラルウォーターとグラスを隣に並べる。お姉ちゃんの足をマッサージするために、ベッドの脇に腰をかけた。手持ち無沙汰な私はお茶をいれる。

「大変ですね、先生。」

「そんなことないよ。」

「でも、気が休めないでしょ。」

「そうだね。かすみの一つひとつの仕種が気になる。気は休めないけど…」

先生はマッサージをする手を止めてこちらを向いた。

「幸せだよ。」

少しの沈黙のあと、先生は「本当はね、嬉しかつたんだ。」と呟い

た。瞳はまっすぐ寝顔を見つめている。

「かすみが、子供が欲しいと言ってくれて。」

「え…」

「夫婦じゃなくて家族になりたいと言ってくれたんだ。僕は早くに父親を亡くしたし、一人っ子で、母さんと二人暮らしだった。それに、一人暮らしも長いから家族の温かさに憧れていた。それを、まだかすみの病気が分かる前に話したことがあって。かすみは、僕の夢、叶えようとしてくれたんだ。でも僕には自分の夢よりかすみの方が大切だった。だから、反対をした。かすみに諦めさせようと怒鳴ったこともあった。だけど、かすみの気持ちは変わらなかった。」

「お姉ちゃん、頑固ですからね。」

「あそこまで頑固だったとは、正直驚いたよ。だけどね、かすみがそこまで言うんなら、真っ向から反対しないで、色んな道を探してみようと思った。子供を産むリスクはあるかもしれないけど、それ以上にかすみの生きる力を信じたいと思った。」

「先生に、そんな風に思われて、お姉ちゃん、幸せですね。羨ましいなあ。」

「夫婦だからね、信じ合っと思い合わなきゃ。」

東風先生は、布団を足に掛けると立ち上がった。

「僕もかすみも楽しみにしているよ。」

「何をですか…」

「あかねちゃんと乱馬くんの兄、姉になること。」

湯飲みの中のお茶を飲み干した先生は悪戯な笑顔で私を見つめた。

私は、慌ててお休みなさいを言うと、部屋から出た。

聞こえもしない、先生とお姉ちゃんの笑い声が聞こえる気がして、

顔が熱くなった…

24、繋がり

冬休みが終わり、久しぶりに東風先生の家に行った。診察室の扉はあいているのに、誰もいない。

居住空間である奥部屋に進むと先生の声が聞こえてきた。ゆっくりと扉をあけると、電話中の先生と目が合った。

「じゃあ、今から連れていきます。はい、はい……いえ、大丈夫です。意識もしっかりしているので……はい、お願いします。」

お姉ちゃんに何かあったのだろうか。寝室のドアは閉まったままだ。

ドアを見つめていると、「それでは……」と先生の電話を切る音が聞こえた。

「お姉ちゃん、どうかしたんですか？」

「うん、あんまり具合が良くないみたいなんだよ。朝から少し吐き気がするって言うて。熱はないし、吐くわけでもないから、様子を見てたんだ。でも昼過ぎから熱が出てきて。病院連れていくことにしたんだ。」

「大丈夫なんですか？インフルエンザですかね……」

「いや、そしたらもつと熱も出ると思うんだ。」

先生は寝室のドアを開け、「かすみ、病院にいこう」と声をかけた。

お姉ちゃんは、目を開けると、私に「あら、あかね来てたの」と微笑んだ。

「お姉ちゃん、大丈夫？」

「ええ。心配かけてごめんね。ちょっと胃がムカムカするけど、大丈夫よ。苦しくもないし。」

「本当に？」

「大丈夫よ。健康な人だって、年に一回くらい熱をだしたり、お腹

を壊したりするでしょ。それと一緒に。ただ、心臓に負担がかかる
と駄目だから診てもらうだけ。」

お姉ちゃん、体を起こすと、緩やかに髪を縛り、コートを羽織つ
た。思ったほど、体調が悪いわけではなさそうだ。

「念のため、マスクして。」

先生はお姉ちゃんにマスクを渡す。

「先生、一人で大丈夫ですか？」

「大丈夫だよ。万が一、入院とかになったら、すぐお父さんに連絡
いれるから。」

「分かりました。じゃ、家で待ってます。」

「あかね、ごめんね。せつく来てくれたのに。」

「そんなこと、気にしないで。じゃ、気をつけてね。」

私は、お姉ちゃんが車に乗り込むのを確認すると、先生に荷物を渡
した。

先生は、何度も大丈夫を繰り返していた。

家に帰ると、お父さんにお姉ちゃんが病院に行ったことを伝えた。

お父さんはうーんと唸り、最近、寒かったからなあと言いた。

8時を過ぎた頃、「こんばんはー」と東風先生の声がした。

「東風くん、あがつてきなさい。」

お父さんの返答に廊下を歩いてくる足音が聞こえる。「邪魔しま
す」

「かすみ！起きてて良いのかね？」

東風先生の半歩後ろにかすみお姉ちゃんがいた。

「ご心配、おかけしました。」

東風先生は、お姉ちゃんを先に居間へ入るよう促しながらそう言っ
た。

「大丈夫だったの？」

「ええ。」

「風邪だったのかね？」

「違うんです…あの…」

「何か悪い病気なのかい？」

お父さんは、声を落として、恐るおそる先生に尋ねた。

「それが…」

先生は唇をかむと、僕から言っただけで良い？と小声で尋ねた。お姉ちゃんの前で、深呼吸を一つする。

「子供ができました…」

「え…」

お父さんは、場違いなほど素っ頓狂な声を出した。

「病院で妊娠していると言われました。」

「本当？お姉ちゃん！」

「ええ。6週目ですって。」

「秋にはかすみも母親か…」

お父さんはお姉ちゃんの顔を見ながら、感慨深げに呟いた。

「体調管理だけは、気をつけないとね。」

「そうね。赤ちゃんの命もしっかり守らなきゃ。」

満面の笑みを浮かべるお姉ちゃん。

女としての美しさと母としての強さを合わせた素敵な笑みだった。

25、慈しみ

お姉ちゃんのお腹の中に、新しい命が宿った。

東風先生が望み、お姉ちゃんが叶えなかった「家族」の形が現実になろうとしていた。

「東風さんがね、子供にはお父さんに武道を教えてもらって張り切ってたわ。」

妊婦さんらしくなってきたお姉ちゃんは、お腹に手を当てながら、もう片方の手で紅茶を私に出してくれた。

外からポカポカした陽射しが入ってきて、桜の花びらがチラチラと舞っている。

「武道って産まれてくる子、女の子なんですよ？」

つい先日の検査で女の子と判明したばかりだ。

「あら良いじゃない、あかねもやってるんだし。」

「そりゃそうだけど。」

「あかねおばちゃんみたいに元気で強い子になるのよねー」

お姉ちゃんは、まだ見たこともない我が子が可愛くてたまらないようだ。優しくお腹を撫でて話し掛ける。

「もお、おばちゃんって！大学入学した分なのに！…でも、武道させるならお父さん喜ぶね。すぐにでも胴着作っちゃうかも。」

「いくらなんでも早過ぎるわよ。まだ産まれてきてもないんだから。」

「わかんないよー、お父さんのことだから。もう服だってかなり買ってきたんでしょ。」

「そうなのよ。女の子って分かった途端、服ばかり買ってきて。困っちゃうのよ、なんて言いながら笑うお姉ちゃんの顔は相変わらず穏やかだ。」

「名前考えてるの？」

「まだ全然。でも東風さんは色々考えてるみたい。」「そうなの？」

「本屋さんに行くとな、何冊か名付けの本を手取るのよ。買っていこうって言うと、もう少し自分で考えたいって買わないんだけどね。」

「先生、かなり頭抱えてるんじゃない。名前は親からの最初のプレゼントだつて言うもんね。」

「そうね…最近思うもの。お父さんもお母さんも、私たちが生まれるときこんな気持ちだったのかなって。まだ顔を見てないこの子のことを考えてるとね、ちゃんと親としてやってかなきゃいけないって思うし、愛しくてすごく幸せな気分にもなれるのよ。」

お姉ちゃんの顔は本当に生き生きしていて、病気だつてことを忘れてしまいそうな生命力を感じる。

「良かったね、赤ちゃん産むこと決意して。」

「ありがとう。東風さんやお父さん、みんなには心配かけちゃって自分じゃ何もできないのに、ワガママ言つて…迷惑も心配も掛けるって判つてるけど。母親になれるって本当に嬉しいわ…」

今日、何度目が解らないお姉ちゃんのお腹に話し掛けるような微笑みに、私は目を奪われる。

お姉ちゃん…

気付いてますか？

お姉ちゃんは自分の命を賭けてまで愛する人の夢を叶えようとする強い人だと。

その生命力が私たちに生きる意味を教えてくれてることを。

そして、新しい命に希望をプレゼントできるってことを…

私はこの日、久しぶりにお姉ちゃんが作ってくれた夕食を食べた。

懐かしい母の味がした。

26、ようじそ

外では蝉が短い命を燃やし、ミンミンと鳴いている。その日は特別暑い日で、私たちにとって忘れられない日になった。

この日が訪れると分かったのは2週間前だった。病院の公衆電話を使って「お腹が大きくなって、心臓への負担が大きくなってきたから入院することになった」とお姉ちゃんからお父さんに電話が入った。元気だし、赤ちゃんも順調に大きくなっている。何かあったときの用心のためだから心配しないで。といつもと変わらない声で電話があつたらしい。

その日の夜、東風先生から2週間後に帝王切開をすることが決まったと話があつた。予定日より7週早い。大きさでいうと、2000グラムを越えるぐらいだそうだ。今の所、お姉ちゃんにも赤ちゃんにも異常はなく、検診で、赤ちゃんがおしゃぶりをしている姿が見れたと先生は嬉しそうだった。

お父さんの手前、冷静さを装っていた先生だけど、実はかなり緊張をしていた。家族が増える喜び、お姉ちゃんの体力が持つのかという不安。

手術当日の朝、お姉ちゃんのベッド脇に座り、先生は何度も時計を見つめる。

「東風、ちょっとは、じつとしたらどうだ？」
先生のお母さんが先生を窘める。

「心配しなくても大丈夫よ。私もこの子も東風さんのために頑張るから。」

一番不安なはずのお姉ちゃんが逆に私たちを励ましてくれる。

「小乃さん、そろそろ行きましようね。」

看護師さんの声が今までの穏やかな空気を遮った。

お姉ちゃんは小さく「お願いします」と言うと、「頑張ってくるわね」と私たちに笑いかけた。そして東風先生に「名前、考えておいてね」と頼む。

いくつか候補が挙がっては消えていく赤ちゃんの名前。結局決める前に出産の時を迎えてしまった。

「分かった。僕も頑張るからかすみも…」

東風先生は言葉を詰まらせたけど、一言「信じてるから。」と言葉を加えた。

一年半前、お姉ちゃんが心臓の手術をした時のように、ベンチで待つ。

どうか無事に産まれてきて…

みんながそう思っていた。手術は麻酔さえ効いてくれば短いものみたい。それでも私たちにはとても長く思えた。東風先生は、しきりに何度も深く深呼吸をした。

「東風、おまえが落ち着かなくてどうする？ かすみさんや赤ん坊を信じると決めたんじゃない？」

「そ、そうだけど…」

いつものしつかりとした先生はどこへやら。頼りない返事が返ってきた。

「大丈夫だ。おまえが産まれた日も暑い日だったから。暑さはおまえにとつていい日なんだよ。」

小さな手を先生の手に重ねる。

「おまえだけじゃない。皆さんもわしも、みんな信じておる。」

東風先生だけでなく、みんなか耳を傾けている。

「大丈夫だ。明るい未来が待っておるぞ。」

そう言つて目を細めた先生のお母さん。手にはしつかりとお守りが握られていた。

「未来……」

先生が呟くように言葉を反芻したときだった。待ちに待った産声が私たちの耳に届いた。静かな廊下にそれは響き、私たちは一斉に手術室を見た。

「おめでとうございます。元気な女の子ですよ。」

2200グラムの赤ちゃんは保育器に入ってしまったため、私たちは見ることができなかった。

しばらくして、酸素マスクを付けたお姉ちゃんが手術室から出てきた。緩んだ気持ちがあつと引き締まる。

「大丈夫ですよ。心臓に異常はありません。お母さんもよく頑張りましたね。」

先生の言葉に東風先生は、これ以上ないほど頭を下げた。仕切りに鼻をすすする音が聞こえる。

「赤ちゃんに会われますか？」

看護師さんの質問に東風先生は迷わず首を横に振った。

「妻と一緒に会いますから。」

あんなに落ち着きのなかった先生の目はいつもの穏やかなものに戻っていた。一時間くらいで麻酔が切れると言われ、お父さんと先生は病室へ入って行った。お姉ちゃんが目を覚ますで、廊下で待っている私たちは誰も話すことなくただ時が経つのを待っていた。

「かすみ、麻酔から覚めたから。」

ガチャリとドアが開き、ホッとした顔の東風先生が出て来た。

「で、お姉ちゃんは？」

「大丈夫。まだ朦朧としてるけど。赤ちゃんは？って聞いてきたから大丈夫って答えたら安心したみたいにもたまた眠っちゃったけど。どうやら、何回かその繰り返しみたいだ。」

先生は「まだ面会できるまでにちょっと掛かるから食事に行ってください。」と提案した。

私たちは食堂で遅い昼食を取った。

食堂はすいていて、私たちの他にはお父さんと二歳くらいの男の子がいた。

男の子は「もっとママに会いたい」と拗ねていて、お父さんが「お兄ちゃんになったんだ。泣いてたら駄目だぞ。」なんて言いながらカレーライスを口にいれていつている。

「東風先生もあんな風になるのかな？」

なびきお姉ちゃんが目を細める。

「あそこまで父親らしくなるのは、まだまだ先じゃ。」

「新米は、新米らしく回りに助けてもらわにや潰れちまう。だから、皆さん迷惑かけますが、あの子をお願いします。」

さつきまで、豪快に笑っていた先生のお母さんは、深く頭を下げた。「やだ、そんな。先生は姉のこと大切にしてくれていて、本当に感謝してるんです。先生は姉の生きる希望なんです。父も私たちも、先生にはいくら感謝しても届かないくらい姉を大切にしてくれています。先生が大変なことは私たちがやって当たり前のことだと思っています。」

なびきお姉ちゃんは顔の前で手をヒラヒラと振った。「冗談ぽく聞こえるようわざと明るい声で。でも瞳はまったく曇りがなく真っ直ぐだった。」

昼食を終えるとまた病室の前に戻った。相変わらずお姉ちゃんは寝たり起きたりみたい。でも少し起きてる時間が長くなってきたから、そろそろ面会ができると先生が教えてくれた。

「中に入られて大丈夫ですよ。」

看護師さんと一緒に病室に入る。

「お姉ちゃん……」

耳元でゆつくりと声を掛けるとお姉ちゃんはニッコリと微笑んだ。

「良かったね。」

「ありがとう。」

短い会話だけど、お姉ちゃんの意識がしっかりとしていることに嬉しくなる。

「小乃さん、調子が良ければ5分ほど赤ちゃんに会いますか？」

先生の問いかけにお姉ちゃんは東風先生を見つめた。

「僕も会ってないんだ。どうする？ かすみが調子が良いなら一緒に会いにいくのか。」

「はい…」

ベッドに寝ているお姉ちゃんを車椅子に移動させる。東風先生が車椅子を押して新生児室まで歩く。

私たちはとりあえず、外から眺めることにした。

東風先生とお姉ちゃんは、一つの保育器の前で止まった。看護師さんが中から赤ちゃんを抱き上げお姉ちゃんの膝の上に乗せた。

たちまちお姉ちゃんの目から涙が零れる。東風先生はしゃがみ込んで赤ちゃんの手を触りながら時々お姉ちゃんに話し掛けている。

二人が夢見ていた『家族』の姿がそこにあった。

お姉ちゃんはお出てくると目を真っ赤に腫らしていた。

「皆さんのおかげで、無事、娘が誕生しました。ありがとうございます。」

東風先生は、私たちに向かって頭を下げる。

「おめでとう。」

お父さんはそう言って東風先生と握手した。

みんなが笑って一つの命と出逢った。

ようこそ この世界へ…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9147b/>

純愛

2010年10月12日05時02分発行